

表 249

バナナ：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000房	単収 房/ha
1	バ イ ア	53.7	74.1	1,380
2	サ ン パ ウ ロ	33.4	46.9	1,405
3	セ ア ラ	28.7	45.0	1,566
4	ミナス・ジェライス	34.4	36.3	1,057
5	そ の 他	245.5	267.6	1,090
	合 計	395.7	469.9	1.188

出所：IBGE

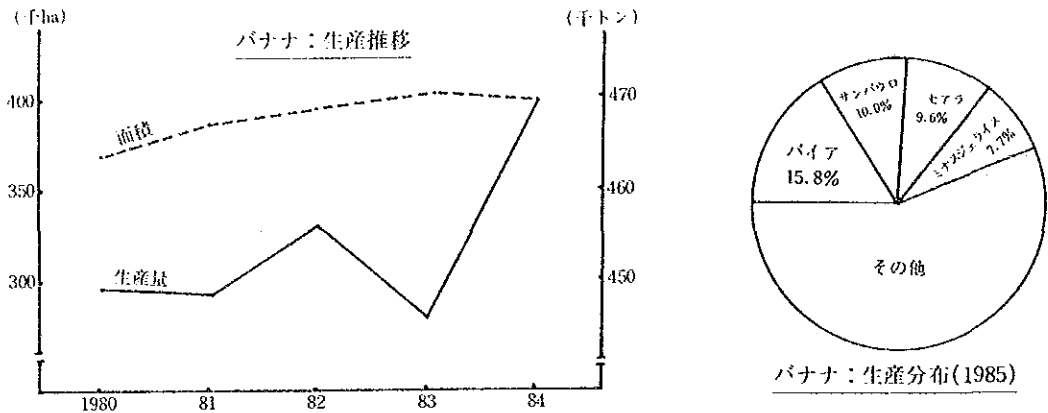


表 250

バナナ：過去5ヶ年間の生産推移

1,000房

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 バ イ ア	63.0	72.4	75.2	75.3	74.1
2 サ ン パ ウ ロ	41.3	43.0	40.7	39.1	46.9
3 セ ア ラ	45.7	30.0	41.0	27.5	45.0
4 ミナス・ジェライス	32.7	35.5	34.5	35.3	36.3
5 そ の 他	265.3	266.4	263.6	263.9	267.6
合 計	448.0	447.3	455.0	441.1	469.9
面積 1,000ha	371.2	388.0	395.4	401.7	395.7

出所：IBGE

表 251

バナナ：主要生産地の単収

房/ha'

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
バ イ ア	1,359	1,371	1,388	1,384	1,360
サ ン パ ウ ロ	1,158	1,216	1,027	986	1,405
セ ア ラ	1,250	1,000	1,375	925	1,566
ミナス・ジェライス	1,135	1,096	1,041	1,042	1,057
全 国 平 均	1,206	1,153	1,150	1,098	1,188

出所

ロ) 国際市場とブラジルの輸出

ブラジルは世界最大のバナナ生産国かつ最大の消費国で年間約7,000千トンを生産している。世界の生産国としてはインド(4,500千トン)、フィリッピン(4,100千トン)、エクアドール(2,265千トン)、タイ(2,028千トン)、インドネシア(1,800千トン)等がある。世界の生産国52ヶ国の中わずか6ヶ国で世界生産の53%が占められている。

一方、世界の貿易に占めるブラジルの位置は極めて低く、1982年の統計で世界輸出のわずか0.8%を占めたに過ぎない。1982年まで世界最大の輸出国はエクアドールであり、コスタリカ、ホンジュラス、フィリッピン、コロンビアがこれに続き、この5ヶ国で世界輸出の約70%が占められている。

世界のバナナ輸入市場は西独がもっとも大きく(506千トン~82年度)、その他フランス、イタリー、英国の4ヶ国で世界輸入の24%が占められている。また、この他8ヶ国を加えたヨーロッパ12ヶ国の輸入は世界輸入の31%を占める。

下表に示されるようにヨーロッパを主体とする世界の市場はエクアドル及び中米諸国によって供給されており、ブラジルはこの市場に参加していない。ブラジルの市場は隣国のアルゼンチンとウルグァイに限定されており、アルゼンチンがブラジルのバナナ輸出の74%を占めている。国内ではサンパウロ州内のバナナ生産地であるレジストロ地方が対アルゼンチン輸出の中心地帯で大半がここより輸出されており、輸出経路はクリチーバーポルト・アレグレを通過しリオ・グランデ・ド・スール州とアルゼンチン国の境界点ウルグァイアーナ市を經由して、アルゼンチンのサンタ・フェ州を通りブエノス・アイレス市に到達する陸路経路で行なわれている。昔はサントスより船による輸送が行なわれたこともあったが、輸送コストがかかり、積替えの手間が増えるため現在海上輸送は利用されていない。

隣国のアルゼンチンはバナナの栽培適地が少なく、国内需要の絶対量が不足するためブラジルにとっては格好の市場として輸出が続けられ、70年代の前半までこの市場を独占してきたが、70年代の中期よりエクアドールのブエノス市場進出が始まり、当初ダンピングによる積極的な売込みや、外観の点ではるかにすぐれていることな

表 252 バナナ：世界の輸出入

輸 出 1,000トン				輸 入 1,000トン			
国 別	1980	1981	1982	国 別	1980	1981	1982
エクアドール	1,437	1,230	1,261	西 独	534	523	506
コスタリカ	999	1,026	1,010	フ ラ ン ス	446	462	463
ホンジュラス	860	820	914	イ タ リ ー	279	249	324
フィリッピン	924	870	927	英 国	323	328	328
コロンビア	670	803	733	オ ラ ン ダ	114	109	98
バ ナ マ	500	573	524	ベ ル ギ ー	87	84	87
グアテマラ	330	400	404	オーストリア	77	76	77
中 国	101	95	99	ス ェ ー デ ン	70	72	72
ブラジル	67	67	59	ス イ ス	64	58	59
ジャマイカ	55	18	22	フィンランジア	39	42	45
そ の 他	969	1,027	1,075	そ の 他	4,643	4,790	4,736
計	6,912	6,929	7,028	計	6,676	6,793	6,795

出所：FAO

表 253 バナナの輸出推移

年度	重量 1,000トン	金額 100万ドル
1979	128.5	24.5
80	67.3	11.2
81	66.7	12.7
82	59.2	10.5
83	89.4	10.7
84	103.2	16.5

出所：CACEX

08.01.02.01

表 254 バナナ：1984年の輸出実績

輸出先国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
アルゼンチン	75.9	13.0
ウルグアイ	27.3	3.5
その他	--	--
計	103.2	16.5

出所：CACEX

どからブエノス市場乗込みに成功しており、ブエノス・アイレス市の市場ではブラジル製品は2級品の位置に甘んじている状況にある。エクアドールのバナナ産業は石油産業に次いで重要な位置を占め、一時は日本にも大量に輸出するなど輸出実績があり、組織上もバナナ庁が設置されておりブラジルのコーヒーに似て手厚い保護下にある。これに対しブラジルの場合は、サンパウロ州内レジストロ地方の限定された産業の域を出ておらず、輸出組織も個人組織の域を出ておらずエクアドールに対抗出来る態勢になかった。しかしこの様なエクアドールの攻勢の前に政府もようやく事の重要性を認識し始め、輸出梱包の規制などに乗り出しているがいまだ本格的な態勢がない。地域産業の保護、バナナ輸出の拡大のため根本的な対策と積極的な援護が望まれている。

## ハ) 国内市場及び価格

サンパウロ市中央卸市場 (CEAGESP) の統計によると、84年度におけるバナナの入荷量は 104,947 トンで前年を(-)17.7%下廻った。前年も(-)4.8%の減少であったので、このところ3年間にわたって入荷量は減少を

表 255 バナナ：CEAGESP入荷量及び価格

年度	重量 トン	金額 Cr\$100万	単価 CR/t
1982	133,852	1,755.9	13,119
83	127,441	5,570.0	43,707
84	104,947	14,879.0	140,919

出所：BOLETIM ANUAL

表 256 バナナ：小売価格推移 (ナニカ種) CR/1打

月別	1982	1983	1984
1	60	96	394
2	72	89	392
3	73	105	392
4	73	123	448
5	74	129	466
6	73	164	473
7	70	171	452
8	68	201	546
9	70	265	781
10	75	344	1,012
11	78	384	1,124
12	88	349	1,007

出所：IEA

続けている。1トンあたりの平均単価は Cr\$ 140,919 で対前年比 222% の増加であり、インフレ率と同等の値動きで実質的には前年並みの価格が推移した。しかし小売価格の方は年間 189% の増加に止まっておりインフレ率を下回る価格推移であった。一般消費層の需要の後退から小売りマージンを下げて販売したあとがみられる。

州内の生産地帯ではリバイラ川流域を最大の生産地としているが、前年この河口に堰が建設され (Barragem de Valo Grande) ため、周辺のバナナ園に浸水し多大の被害を与える問題が発生した。このため出荷の中断、一時的な価格の上昇などがみられた。

## 二) 生産コスト

サンパウロ州レジストロ地方のバナナ生産コスト予想は表 257 の通りである。

表 257 バナナ：生産コスト 1 ha 2,200本植 30トン生産の場合 レジストロ Cr\$

区 分		84/85		85/86	
A- 作業コスト	所要日数	単 価	金 額	単 価	金 額
1) 一 般 労 力	71.67	6.3	449.4	20.0	1,429.8
2) トラクター運転手	5.12	9.6	49.1	26.1	133.6
3) 4 輪 ト ラ ク タ ー	4.87	65.3	318.0	191.8	933.8
4) 運 搬	2.61	4.4	11.5	14.5	37.7
5) 防 除	2.00	3.8	7.6	11.7	23.3
6) 積 込	0.13	14.9	1.9	63.7	8.3
7) ト ラ ッ ク	0.25	69.8	17.4	196.0	49.0
8) 輸 送	—	—	—	—	155.0
小 計	—	—	854.9	—	2,615.6
B- 資材コスト					
1) 配 合 肥 料	2.20 T	547.9/T	1,205.5	1,691.4/T	3,721.1
2) ス プ レ ー 油	225.00 ℓ	1.7/ℓ	380.9	5.5/ℓ	1,245.4
3) 殺 虫 剤	66.00 kg	6.0/kg	398.0	27.8/kg	1,831.5
4) CASCALHO	35.00 m <sup>3</sup>	3.5/m <sup>3</sup>	122.5	—	—
5) 竹	70.00 Dz	1.9/Dz	134.4	2.7/Dz	189.0
6) 殺 虫 剤	11.00 ℓ	18.7/ℓ	205.8	56.4/ℓ	620.8
直 小 計	—	—	2,447.1	—	7,607.8
直接費計	—	—	3,302.1	—	10,378.4
C- 間接コスト					
1) 機 械 償 却 費			74.6		247.7
2) 銀行利息 生産費			4,141.3		13,197.9
〃 固定投資			25.1		
合 計	—	—	7,543.2	—	23,824.1

出所：IEA

### 3.5.3 ぶどう

83/84農年の生産量は 603.4 千トンで、リオ・グランデ・ド・スール州 (64.7%)、サンパウロ州 (18.3%)、サンタ・カタリーナ州 (12%) の 3 州が国内生産量の 95% を占めている。リオ・グランデ・ド・スール州では生産量の 90% がぶどう酒原料に向けられている。同州では歴史的に 3~4 年毎に減産をみる周期を繰返してきたのを特徴としている。

サンパウロ州におけるぶどう栽培は食卓用が主体をなし、高級品のITALIA種や乾ぶどう用種なしのADONA、IRACEMAやMARIA種等の栽培が盛んであり、従来の乾ぶどう輸入の減少に貢献している。

表 258 ぶどう：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg / ha
1	リオ・グランデ・ド・スール	38.6	390.2	10,102
2	サンパウロ	9.0	110.6	12,426
3	サンタ・カタリーナ	5.6	72.5	12,881
4	パラナ	2.2	19.7	8,984
5	その他	1.6	10.4	6,500
合 計		57.0	603.4	10,602

出所：IBGE

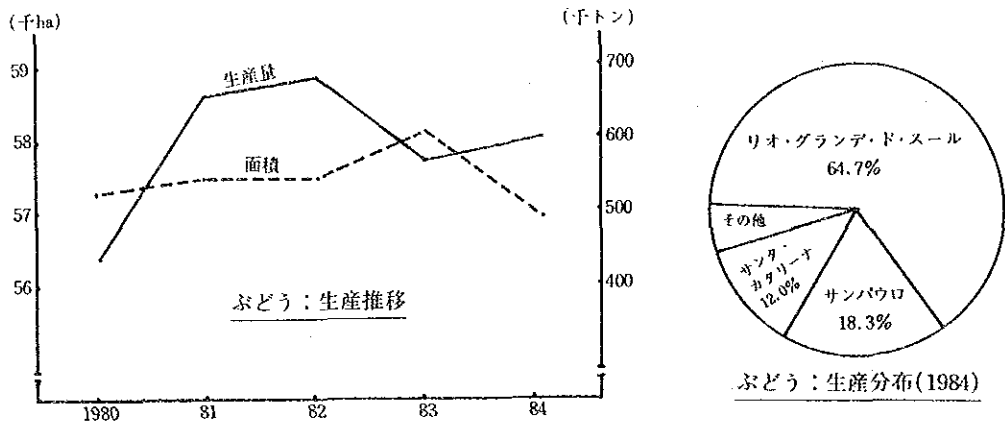


表 259 ぶどう：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 リオ・グランデ・ド・スール	221.0	415.6	430.0	347.5	390.2
2 サンパウロ	149.0	146.4	149.0	141.5	110.6
3 サンタ・カタリーナ	44.4	76.0	80.5	55.0	72.5
4 パラナ	19.2	17.6	19.2	19.5	19.7
5 その他	12.4	7.5	9.8	11.0	10.4
合 計	446.0	663.1	688.5	574.5	603.4
面積 1,000ha	57.3	57.5	57.5	58.1	57.0

表 260 ぶどう：主要生産地の単収 kg / ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
リオ・グランデ・ド・スール	5,796	10,800	11,116	8,765	10,102
サンパウロ	14,607	13,832	14,487	15,386	12,426
サンタ・カタリーナ	8,737	14,320	15,852	10,371	12,881
パラナ	8,575	8,619	8,734	8,545	8,984
全 国 平 均	7,776	11,527	11,965	9,895	10,502

出所：IBGE

### 3.5.4 バインアップル

ブラジルはタイ、フィリピンに次ぐ世界3位の生産国で世界生産の7%を占めている。世界の生産はここ10年間に40%以上の増加を示しており、この傾向に似てブラジルのバインアップル生産も増加を続けている。

ブラジル国内のバインアップル生産地帯は表261に示す5州に集中し、全国生産の84%を占めている。

サンパウロ州内の生産地帯はパウラー (46.5%)、リベイロン・プレット (18%)、サン・ジョゼ・ド・リオ・ブ

表 261 バインアップル：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000ヶ	単 収 個/ha
1	パライーバ	9.6	255.2	26,587
2	ミナス・ジェライス	10.4	182.4	17,484
3	サンパウロ	1.8	36.7	20,283
4	エスピリト・サント	1.2	36.7	30,040
5	バイア	2.7	30.6	11,496
6	その他	6.5	99.4	15,293
合 計		32.2	641.0	19,881

出所：IBGE

表 262 バインアップル：世界の生産 1982

国 別	生産量 1,000トン
タイ	1,824
フィリピン	871
ブラジル	646
インド	643
メキシコ	550
米 国	549
象牙海岸	350
その他	3,426
計	8,859

出所：FAO

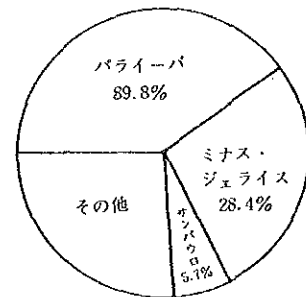
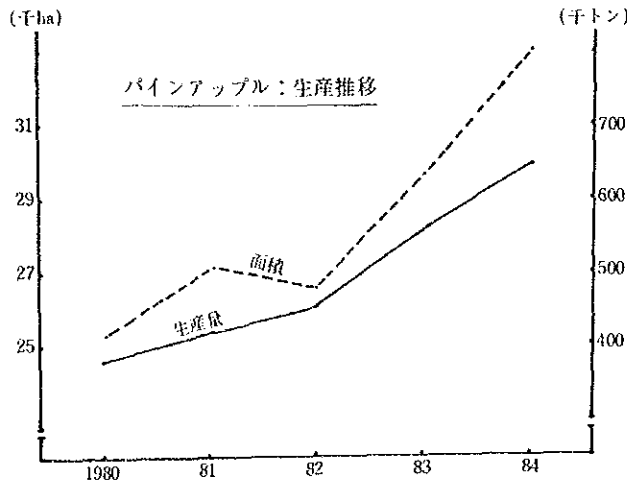
表 263

バインアップル：過去5ヶ年間の生産推移

1,000ヶ

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 パライーバ	111.5	142.0	161.0	206.8	255.2
2 ミナス・ジェライス	101.8	107.8	125.5	167.2	182.4
3 サンパウロ	21.0	20.5	23.6	27.1	36.7
4 エスピリト・サント	14.3	20.4	18.8	25.3	36.7
5 バイア	36.2	37.7	39.3	39.3	30.6
6 その他	92.4	84.6	77.8	85.6	99.4
合 計	377.2	413.0	445.7	551.3	641.0
面積 1,000ha	25.2	27.0	26.4	30.5	32.2

出所：IBGE



バインアップル：生産分布(1984年)

表 264

## パイナップル：主要生産地の収収

個/ha 個1ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
パラアイバ	18,498	19,154	21,955	22,720	26,587
ミナス・ジェライス	15,599	14,464	15,779	17,171	17,484
サンパウロ	20,192	21,785	21,870	22,073	20,283
エスピリト・サント	22,000	22,000	33,139	26,327	30,040
バイア	12,500	12,508	12,332	12,305	11,496
全国平均	14,977	15,236	16,902	18,086	19,881

出所：IBGE

表 265

## パイナップルの輸出推移

年度	重 量 1,000トン				金 額 100万ドル			
	青果	缶詰	ジュース	計	青果	缶詰	ジュース	計
1981	16.3	2.2	3.9	22.4	5.6	1.9	4.4	11.9
82	9.6	1.4	3.1	14.1	3.1	1.3	3.2	7.6
83	13.4	2.8	6.8	23.0	3.1	2.3	6.3	11.7
84	18.8	4.0	15.1	37.9	5.5	3.6	15.0	24.1

出所：CACEX

関税番号 08.01.03.00 20.06.01.01 20.07.01.01

レッド（16％）に集中し、この3地方で州内生産の80％が占められている。1978年頃の集中度は45％であったので、その後の面積増加が他地域に比して急速にすすんだことが示されている。中でもパウルー地方ではトゲなしのスムースカエン種の栽培が大規模に行なわれており、食卓用としてサンパウロ市場に出荷されている。

パイナップルの輸出は青果、缶詰及びジュースの形で行なわれている。84年はオレンジ・ジュースの海外需要の急増に平行してパイナップル・ジュースの需要も増加し、オレンジの端境期でパイナップルの収穫期にあたる1～5月間は、ジュース工場の原料買付けが増加した。

表 266 パイナップル：生産者受取価格 CR/100ヶ当り

月 別	1983	1984
1	7,906	26,116
2	9,133	35,830
3	11,856	49,332
4	12,648	52,162
5	13,066	53,751
6	13,130	52,327
7	14,370	47,429
8	15,681	52,927
9	17,635	60,978
10	20,147	71,890
11	19,795	85,073
12	20,690	92,453

出所：IEA

パイナップル・ジュースの輸出は前年と比べて重量で122%、金額で138%の増加で、パイナップル全体の輸出金額は24.1百万ドルであった。

#### ハ) 国内市場及び価格

国内・国外需要の増加により生産の増加にかかわらず価格は上昇を続けており、1979年以降国内価格は常にインフレ率を上廻る実質的な上昇を示した。84年も又年末の価格を前年末と比較すると347%の増加である。

表 267 パイナップル：生産コスト 第1年目 パウルー地区 Cr\$

区 分		84/85		85/86	
A- 作業コスト	所要日数	単 価	金 額	単 価	金 額
1) 一 般 労 力	26.03	6.3	164.4	20.0	520.6
2) トラクター運転手	5.23	9.4	49.2	27.4	143.0
3) 4 輪 トラクター	5.23	65.3	341.5	191.8	1,002.9
4) 耕 起	1.03	3.6	3.7	12.4	12.8
5) 砕 土	0.50	7.6	3.8	37.2	18.6
6) 機 械 中 耕	3.20	2.2	7.1	5.2	16.6
7) 防 除	0.50	6.0	3.0	22.1	11.1
小 計	—	—	572.7	—	1,725.6
B- 資材コスト					
1) 苗	15000.00 U	0.01/U	150.0	0.1/U	1,500.0
2) 殺 虫 剤	1.00 ℓ	19.5/ℓ	19.5	70.1/ℓ	70.1
3) 消 毒 剤	0.41 kg	7.8/kg	3.2	13.2/kg	5.4
4) 配 合 肥 料	2.00 T	391.2/T	782.5	1,220.8/T	2,441.5
5) 除 草 剤	5.79 kg	25.1/kg	145.2	75.5/kg	437.0
小 計	—	—	1,100.3	—	4,454.1
直接費計	—	—	1,673.0	—	6,179.6
C- 間接コスト					
1) 機 械 償 却 費			76.1		258.2
2) 銀行利息 生産費			1,798.4		6,735.8
2) 〃 固定投資			25.0		—
合 計	—	—	3,572.5	—	13,173.6

出所：IEA

### 3.6 野菜類

#### 3.6.1 トマト

##### イ) 生産

前年東北地方の長期乾燥やサンパウロ州における降雨過剰と低温のために生産量を落していたトマトの83/84農年作は、東北地方最大の生産地帯を持つペルナンブコ州で前年比140%の生産増、国内最大の生産地サンパウロ州における前年を上廻る増産のため生産は復活し、82年の生産記録を更新した。



表 268

トマト：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000t	単 収 kg/ha
1	サンパウロ	20.4	780.4	38,309
2	ベルナンブコ	7.6	238.1	31,140
3	ミナス・ジェライス	4.4	169.8	39,790
4	バ イ ア	4.8	142.8	29,718
5	リオ・デ・ジャネイロ	2.4	114.0	47,374
6	そ の 他	12.6	374.6	29,730
	合 計	52.2	1,819.7	34,860

出所：IBGE

表 269

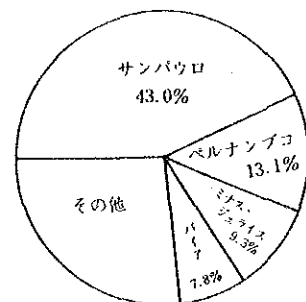
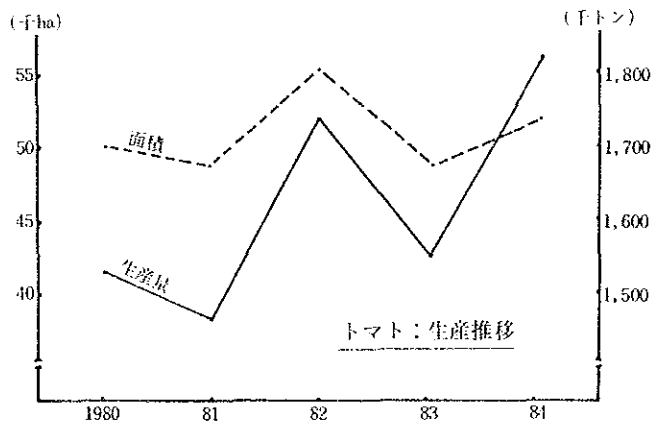
トマト：過去5ケ年間の生産推移

1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 サンパウロ	796.0	690.0	826.0	758.3	780.4
2 ベルナンブコ	122.6	129.2	215.5	99.1	238.1
3 ミナス・ジェライス	144.0	132.3	159.4	151.4	169.8
4 バ イ ア	71.0	71.1	95.4	100.2	142.8
5 リオ・デ・ジャネイロ	91.0	106.0	92.3	112.3	114.0
6 そ の 他	310.7	323.4	348.8	325.7	374.6
合 計	1,535.3	1,452.0	1,737.4	1,547.0	1,819.7

面積 1,000ha	50.1	48.5	55.1	48.1	52.2
------------	------	------	------	------	------

出所：IBGE



## ロ) 市場及び価格

COBAL (ブラジル食糧公社) の資料によると国内で取引されたトマトの量は 861 千トンで、その 54% がサンパウロ州産のものであった。また 84 年のデータでは、サンパウロ州産品の中 73% が工業用原料として消費され、27% が食卓用として市販されたことになっている。

工業原料の方はトマト・ケチャップ、トマト・ジュース、ソースの製造に向けられ、国内市場に供給するほか

少量ながら海外にも輸出されている。

食卓用トマトの場合は、生産地に近い消費市場に出荷されるため国内では地方毎、地域毎にそれぞれ市場の特性を持っており国内価格の動向も一様ではない。またトマトは、野菜類の中でも価格の変動が大きい作物であり、それなりに面白味はあるが他の作物に比して生産コストが高いため非常にリスクの多い作物ともされている。

最近の価格動向についてはサンパウロ州の生産者受取価格を例にとると、年間を通じて物価指数を上廻る高値が支配し、高い収益性を示した。83年より84年にかけて次のような状況が観察された。

- a) 83年当初の数ヶ月ソロカバーナ地区で降雨多量のため病菌が発生して生産を落したため、端境期の3月と4月にかけて値をつりあげた。
- b) 同年下半期には同じくトマト産地のカンピーナス地方の植付が降雨をまて9~10月に集中したため、その収穫も又11月に集中し、12月の値を下げた。
- c) この低値は83年の12月と1月の2ヶ月にわたって続くが、2月に入ると上昇を開始、4月には最高の高値に達している。このような高値を構成したのは84年1月と2月に異常高温が続き、成熟を早めた他病害を発生し単収を低下させたことや、この天候不順のためソロカバ地方の植付けを1月まで延長することが出

表 270

トマト：主要生産地の単収

kg / ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
サンパウロ	34,501	32,547	35,603	36,023	38,309
ベルナンブコ	20,808	20,822	24,960	23,890	31,140
ミナス・ジェライス	34,448	33,203	36,265	36,610	39,790
パイア	27,455	25,611	27,912	26,756	29,718
リオ・デ・ジャネイロ	39,252	42,542	38,240	42,148	47,374
全国平均	30,643	29,916	31,531	32,126	34,860

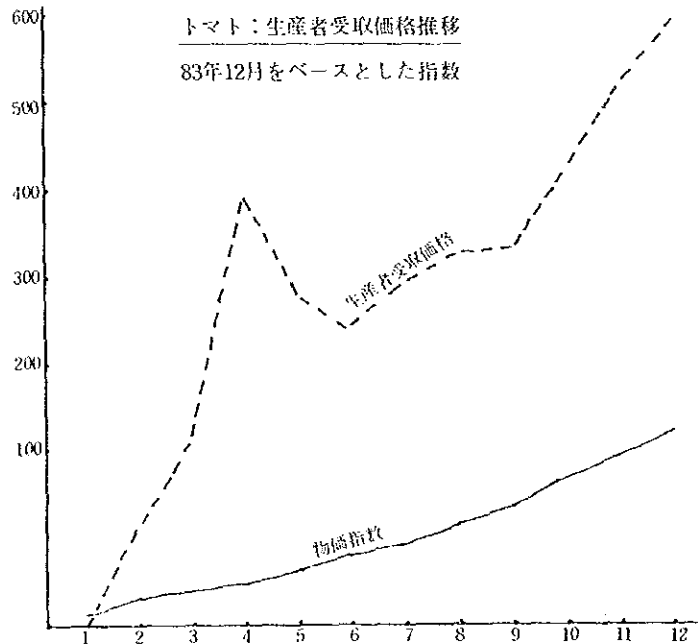
出所：IBGE

表 271 トマト：生産者受取価格

Cr\$ / 27kg

月 別	1983	1984
1	1,972	1,804
2	2,938	3,863
3	3,411	5,590
4	4,111	10,840
5	4,048	8,807
6	3,288	8,101
7	3,260	8,980
8	3,613	9,501
9	3,256	9,566
10	3,885	11,289
11	3,969	13,055
12	1,804	14,325

出所：I.E.A.



米ず、そのため収穫期間が短縮され、4月頃には市場への出荷が極度に減少したためである。

- d) このため端境期は3月より5月の末まで続き、この時点でようやくカンピーナス地方の出荷が開始された。通常カンピーナス地方の収穫は3月の末より開始されるが、84年は1月に始められるはずの植付けが3月になってようやく始められたため収穫が遅れ、端境期間を延したものである。収穫は5月の末より開始され7月から9月にかけて最高潮となっている。

表 272 トマト：生産コスト 1ha当り 2,089箱収穫 サンパウロ州ソロカバ地区 Cr\$ 1,000

項 目		84/85		85/86	
A-作業コスト	所要日数	単 価	金 額	単 価	金 額
1) 一般入夫賃	516.68	6.4	3,306.7	21.6	11,134.5
2) トラクター運転手	8.00	8.8	208.7	28.2	225.6
3) 4輪トラクター	8.00	65.3	1,541.5	191.8	1,534.0
4) 耕 起	1.98	3.6	7.1	12.4	24.6
5) 砕 土	0.86	7.6	6.6	37.2	32.0
6) 中 耕	0.77	7.8	6.0	32.3	24.9
7) 防 除	19.70	13.4	264.4	39.9	786.6
8) か ん が い	16.29	59.5	968.7	168.0	2,736.6
9) 家 畜 畝 立	1.53	0.2	0.3	0.7	1.1
10) 家 畜	1.53	0.8	1.2	2.8	4.3
11) 運 搬	4.39	4.4	88.1	14.5	63.5
小計			6,399.5		16,567.7
B-間接コスト					
1) 種 子	324.0 kg	0.15/g	48.6	0.7/g	212.5
2) 石 灰	4.93 t	13.80/t	68.0	70.0/t	345.1
3) 肥 料			2,919.2		10,272.0
4) 殺 菌 剤			2,270.9		7,624.8
5) 殺 虫 剤			796.9		2,735.6
6) 展 着 剤	3.76 ℓ	5.8/ℓ	21.7	16.3/ℓ	61.2
7) コ ッ プ	17.17 千		60.1	5.0/千	85.8
8) ワ イ ヤ ー №16	45.00 kg	2.3/kg	101.7	5.8/kg	259.2
9) プラスチック・テープ	13.64 kg	4.8/kg	65.5	18.6/kg	253.7
10) 杭	7,445.0 本		156.3	0.1/本	744.5
11) M O U R Õ E S	360.0 本		910.1	12.5/本	4,500.0
12) 箱	2,089.0 ケ	1.4/ケ	3,008.2	6.0/ケ	12,534.0
小計			10,528.2		39,933.0
直接費計			16,927.7		56,500.6
間接費計			10,315.0		32,938.6
合計			27,242.7		89,439.2

出所：IBGE

e) CEAGESPの入荷量と価格の動きをみると、入荷量が多くなると価格が下り、入荷が少なくなると価格が上る典型的な入荷量と価格との関係が観察される。

#### ハ) 生産コスト

サンパウロ州ソコバ地方で1ヘクタール当り2,089箱の収穫を行なう場合の生産コスト予想は表272の通りである。

### 3.6.2 ジャガイモ

#### イ) 生産

トマトに似て上下の変動を繰返えしており84年には増産型の217万トンの生産をあげた。栽培面積は雨期収穫分が101千ha、乾期収穫と冬期収穫分が71.5千haで合計172.5千ヘクタールであった。

州別の生産状況は、前年首位にあったサンパウロ州に代ってミナス・ジェライス州の生産が増加しており、サンパウロ、パラナ、リオ・グランデ・ド・スール州と続いている。この4州で全国生産の91%が占められている。

種いもの供給は主にサンタ・カタリーナ州より行なわれており、最近次第に對外依存を減少しつつある。84年の輸入量は前年の5,800トンに対し3,000トンであった。

サンパウロ州についてみると雨期作・冬期作ともに良好な作柄であり、最近5ケ年間減少傾向にあった雨期作

表 273 ジャガイモ：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg/ha
1	ミナス・ジェライス	33.1	596.4	18,002
2	サンパウロ	29.4	545.2	18,511
3	パラナ	41.0	509.7	12,453
4	リオ・グランデ・ド・スール	48.9	324.3	6,636
5	サンタ・カタリーナ	17.0	160.7	9,432
6	その他の	3.1	35.7	11,516
合 計		172.5	2,172.0	12,594

出所：IBGE

表 274 ジャガイモ：過去5ケ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 ミナス・ジェライス	447.5	492.7	542.7	462.1	596.4
2 サンパウロ	513.6	495.6	573.3	528.9	545.2
3 パラナ	521.8	459.4	598.5	422.9	509.7
4 リオ・グランデ・ド・スール	298.5	288.8	245.0	260.1	324.3
5 サンタ・カタリーナ	142.9	152.0	160.8	118.5	160.7
6 その他の	15.2	23.7	27.7	26.0	35.7
合 計	1,939.5	1,912.2	2,148.0	1,818.5	2,172.0

面積 1,000ha	181.1	171.0	181.9	167.9	172.5
------------	-------	-------	-------	-------	-------

出所：IBGE

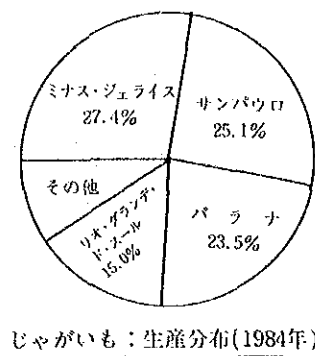
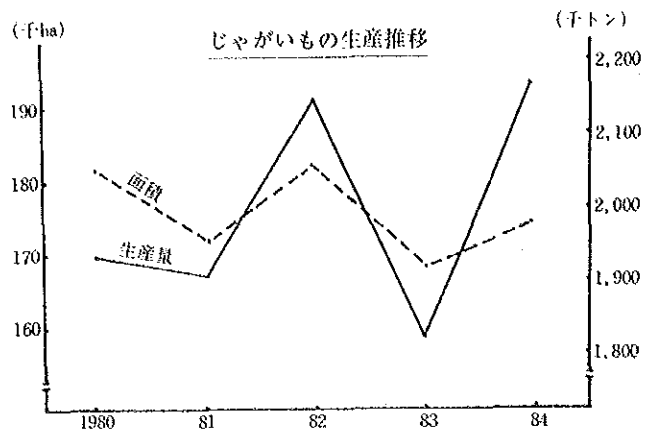


表 275 ジャガイモ：主要生産地の単収 (kg/ha)

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
ミナス・ジェライス	14,035	14,721	16,921	16,811	18,002
サンパウロ	18,008	16,834	17,948	17,028	18,511
パラナ	12,239	11,735	11,862	9,396	12,453
リオ・グランデ・ド・スール	5,317	6,032	5,376	5,664	6,636
サンタ・カタリーナ	7,207	8,291	8,481	7,401	9,432
全 国 平 均	10,710	11,183	11,809	10,833	12,594

出所：IBGE

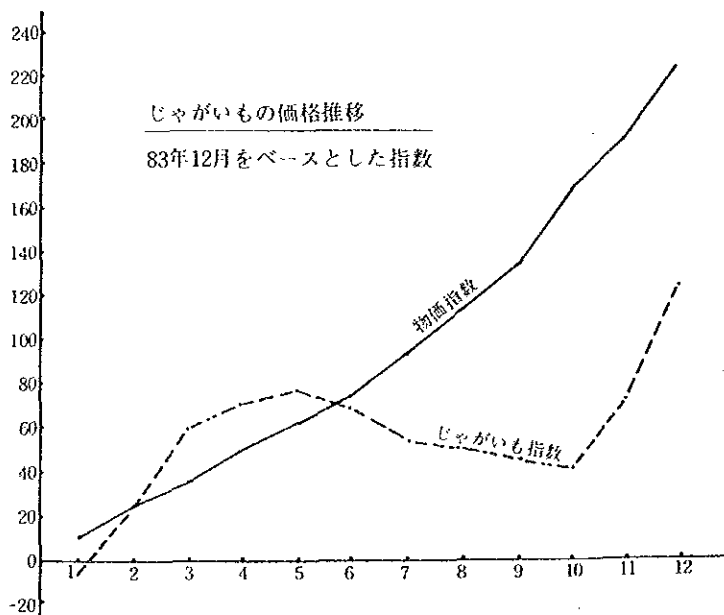
に栽培面積の復活がみられた。

ロ) 市場及び価格

表 276 ジャガイモ：生産者  
受取価格 CrS / 60kg

月 別	1983	1984
1	3,132	10,158
2	3,897	12,896
3	8,447	16,925
4	9,116	18,124
5	11,508	18,893
6	11,600	17,934
7	12,455	16,430
8	14,071	15,963
9	17,876	15,376
10	15,883	14,945
11	13,150	18,467
12	10,611	24,020

出所：I.E.A.



83/84農年の増産により価格は年間を通じて低く、3月～6月を除く期間は物価指数の上昇率以下の価格水準を低迷した。年間を通じた上昇率は126%で、この間のインフレ率230%をはるかに下廻る低い価格指数となっている。

### 3.6.3 玉ねぎ

#### イ) 生産

栽培面積の増加にもかかわらず単収が落ちたため前年比生産量を減少した。

玉ねぎの栽培は各地方の特性に応じた品種の適応により全国各地で行なわれている。代表的な栽培地域の栽培状況は、サンパウロ州のソロカーバ地方の収穫が4月から6月にかけて行なわれ、同期にペルナンブコ州内サンフランシスコ川流域の早生種収穫が行なわれる。パイア州とサンパウロ州内モンテ・アルト地域とサンジョゼ・ド・リオ・バルド地域の収穫は10月まで継続する。9月にはサンパウロ州内アラサツォバ地方、ソロカバ地方、ピエダーテ地区、バラナ、サンタ・カタリーナ及びリオ・グランデ・ド・スール州の収穫が開始され、年末の市場が賑わわれる。

このような各地の収穫が順調にすすみ、それぞれの時期に出荷されると市場は平静に推移するが、天候不順によって本来出荷時期が異なる地方の収穫がぶつかるとう価格の暴落をひきおこしたり、その後の暴騰をみることもある。

表 277 玉ねぎ：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg/ha
1	サンパウロ	16.2	270.1	16,628
2	リオ・グランデ・ド・スール	23.1	156.0	6,746
3	サンタ・カタリーナ	12.1	111.1	9,140
4	ペルナンブコ	6.8	81.8	11,940
5	パイア	5.9	72.0	12,140
6	その他	5.1	27.4	5,372
合 計		69.2	718.4	10,375

出所：IBGE

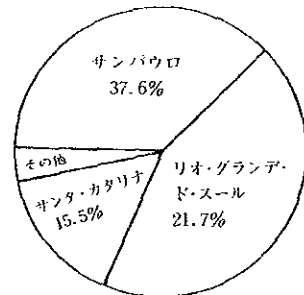
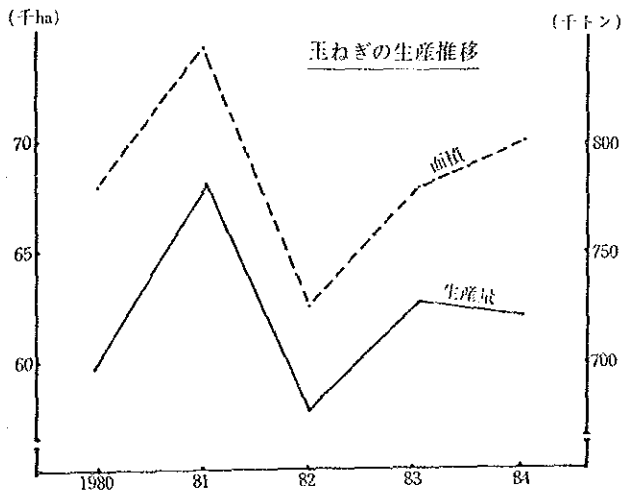


表 278

玉ねぎ：過去5ヶ年間の生産推移

1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 サンパウロ	280.0	282.6	255.6	254.0	270.1
2 リオ・グランデ・ド・スール	151.2	193.0	168.5	167.5	156.0
3 サンタ・カタリーナ	103.6	152.0	113.6	125.7	111.0
4 ベルナンブコ	87.0	71.0	54.1	92.7	81.8
5 パイア	40.1	41.0	46.0	53.0	72.0
6 その他	32.7	38.8	31.4	31.7	27.4
合 計	694.6	778.4	669.2	724.6	718.4

面積 1,000ha	67.0	74.2	62.3	67.2	69.2
------------	------	------	------	------	------

出所：IBGE

表 279

玉ねぎ：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
サンパウロ	16,412	15,527	15,799	14,975	16,628
リオ・グランデ・ド・スール	7,383	8,554	8,555	8,434	6,746
サンタ・カタリーナ	8,458	8,997	9,983	10,191	9,140
ベルナンブコ	12,540	12,000	11,836	12,056	11,940
パイア	10,568	11,982	10,232	12,166	12,140
全国平均	10,360	10,484	10,735	10,787	10,381

出所：IBGE

## ロ) 市場及び価格

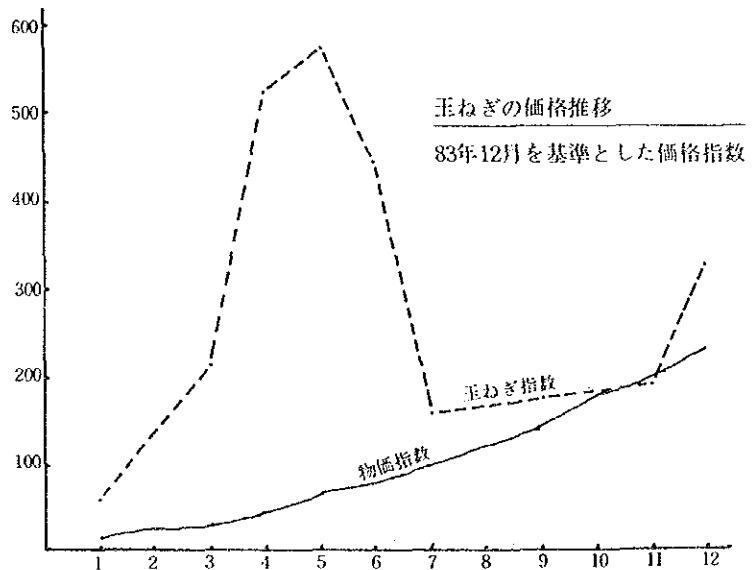
表 280 にみられる通り84年も玉ねぎ価格は非常に大きな変動を続けた。年頭より5月にかけてはサンパウロ州

表 280 玉ねぎ：生産者

受取価格 CrS/kg

月 別	1983	1984
1	80	157
2	100	223
3	138	304
4	131	610
5	128	665
6	173	537
7	197	248
8	236	250
9	198	264
10	175	270
11	128	275
12	98	414

出所：I.E.A. サンパウロ州



内ピエダーデ地方の収穫が遅れたため市場への供給量が少なく価格の上昇をみるが、6月頃より出荷が開始されたのがサンフランシスコ川流域の出荷とぶつかり、たちまち供給過剰となって価格を落し、以降11月まで低値が支配した。サンフランシスコ川流域は70年代の中期にサンパウロ、リオ地方の端境期に出荷して多大の利益をあげた経験から栽培面積が増加し、最近ではその出荷時期とサンパウロ州内生産地帯のピエダーデの出荷時期とのずれが価格決定の大きな要素となっている。サンフランシスコ川流域地方では79/81年に価格暴落のため、大量の玉ねぎをサンフランシスコ川に捨てるという事態も経験している。

### 3.6.4 にんにく

ブラジルのにんにく栽培は81/82農年に64千トンの生産に達したあと下降し、84年は再び80年代の始め頃の水準に戻って43.6千トンの生産に終わった。84年には20.6千トンの輸入が行なわれているので、前年よりの繰越がなかったものとして国内消費量は6万トン前後と推定される。輸入は主にアルゼンチン、スペインより行なわれている。

にんにくは古くより輸入農産物であるため、政府は国内生産の増大を図って自給態勢に持ち込むべく国家にんにく増産計画(Plano Nacional de Alho)を設定し、各生産州に対し1986年より1990年にいたる間の増産計画を提出させている。同計画によると中央-南部地方の10州において栽培面積の拡大が予定されており、上記5ヶ年間に6,379ヘクタール拡大する計画となっている。この面積は平均単収を3,500kg/haとして約22千トンの生産を行ない得る面積であり、現在の輸入量に相当する規模である。

表 281 にんにく：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg/ha
1	ミナス・ジェライス	3.0	11.9	3,920
2	サンタ・カタリーナ	2.1	9.0	4,185
3	リオ・グランデ・ド・スール	2.0	5.7	2,805
4	ゴ ヤ ス	0.9	4.4	4,678
5	サンパウロ	0.9	4.1	4,636
6	その他の	2.9	8.5	2,931
合 計		11.8	43.6	3,686

出所：IBGE

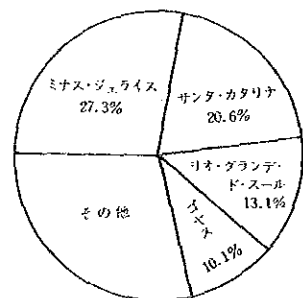
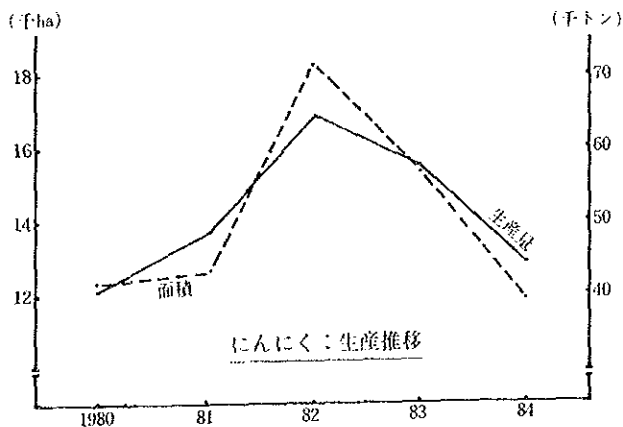




表 282

にんにく：過去5ヶ年間の生産推移

1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 ミナス・ジェライス	16.5	15.7	22.0	19.2	11.9
2 サンタ・カタリナ	6.7	8.0	8.5	8.5	9.0
3 リオ・グランデ・ド・スール	5.1	5.6	5.8	6.0	5.7
4 その他	12.0	18.8	27.9	23.9	17.0
合 計	40.3	48.1	64.2	57.6	43.6

面 積 1,000ha	12.3	12.6	18.3	15.6	11.8
-------------	------	------	------	------	------

出所：IBGE

表 283

にんにく：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
ミナス・ジェライス	4,160	4,266	4,386	4,435	3,920
サンタ・カタリナ	1,860	3,172	3,323	3,323	4,185
リオ・グランデ・ド・スール	2,913	2,683	2,767	2,796	2,805
全 国 平 均	3,261	3,805	3,505	3,695	3,686

出所：IBGE

同国家計画で予定している面積増加は、サンタ・カタリーナ州の1,601 haを筆頭にリオ・グランデ・ド・スール州1,310 ha、ゴヤス州1,158 ha、ミナス・ジェライス州1,086 ha等が大きい。

### 3.7 牧畜部門

#### 3.7.1 牛

##### イ) 保有数

牛の保有頭数についての調査は各5年置きに行なわれる農牧調査において判明する。調査結果が判明している最も新しいデータは1980年度のもので、次の調査は1985年をベースとする調査が86年の1月より開始され、その結果は87年末に発表される予定である。従って最新のデータとしての1980年の農牧調査による全国保有数とIBGE（ブラジル地理統計院）が1984年版統計年鑑に発表した1982年の推定値は表 284 の通りである。

##### ロ) 生産

全国の牛屠殺数は、全国保有頭数の推定値が発表されている1982年の場合 956万頭で、保有頭数推定 123.5百万頭に対し7.7%で、同年のアルゼンチンの屠殺率23.5%と比較して極めて低い指数である。84年の全国屠殺数は未だ発表されていないので主要11州についてみると前年を(-)12.6%減少しているが、前年自体82年を(-)1.4%減少していたので82年以降屠殺数の減少が続いている。

屠殺頭数の中に占める牝牛の割合は、前年が34.4%であったのに対し84年は29.7%に減少した。

84年度の牛肉生産量は2,153千トンで前年の2,360千トンに対し(-)8.8%の減少であった。牛肉生産の減少は屠殺頭数の減少にもとづくものであり、屠殺頭数の減少は80年代に入って以降無差別な屠殺により牝牛が多く屠殺されたことを原因としている。84年に雌牛の屠殺は減少したもののいまだ高い比率であり、上記公式の統計のほかヤミの屠殺を加えると相当の数にのぼるものと想像される。

表 284

## ブラジルの牛保有数

1,000頭

州 別	1980年センサス	比率%	1982年推定
北部地方			
パ ラ ー	2,698.1	2.3	3,199.0
ア マ ソ ー ナ ス	350.4	0.3	391.0
ロ ラ イ マ	313.3	0.3	346.0
ア ク レ	292.0	0.2	427.0
ロ ン ド ニ ア	248.5	0.2	347.0
ア マ バ	46.1	0.1	48.0
小 計	( 3,948.4 )	( 3.4 )	( 4,758.0 )
東北地方			
バ イ ア	8,888.1	7.5	9,350.0
マ ラ ニ ヨ ン	2,786.3	2.4	3,055.0
セ ア ラ	2,349.9	2.0	2,425.0
ペ ル ナ ン ブ コ	1,824.8	1.6	1,820.0
ピ ア ウ イ	1,551.1	1.3	1,668.0
バ ラ イ バ	1,296.2	1.1	1,226.0
セ ル ジ ッ ペ	991.0	0.8	882.0
リオ・グランデ・ド・ノルテ	893.5	0.8	803.0
ア ラ ゴ ア ス	827.5	0.7	884.0
フェルナンド・デ・ノロンニャ島	0.3	—	—
小 計	( 21,408.8 )	( 18.2 )	( 22,113.0 )
中西部地方			
ゴ ヤ ス	16,059.2	13.6	17,439.0
マツト・グロッソ・ド・スール	11,857.5	10.1	13,190.0
マツト・グロッソ	5,216.4	4.1	5,967.0
ブ ラ ジ リ ア	65.8	0.1	80.0
小 計	( 33,199.0 )	( 28.2 )	( 36,676.0 )
南東地方			
ミナス・ジェライス	19,504.2	16.6	19,840.0
サンパウロ	11,665.2	10.9	11,649.0
エスピリト・サント	1,835.0	1.5	1,845.0
リオ・デ・ジャネイロ	1,736.8	1.5	1,803.0
小 計	( 34,742.2 )	( 29.5 )	( 35,137.0 )
南部地方			
リオ・グランデ・ド・スール	13,968.2	11.8	14,212.0
パ ラ ナ	7,875.7	6.7	7,939.0
サンタ・カタリーナ	2,613.6	2.2	2,653.0
小 計	( 24,457.5 )	( 20.7 )	( 24,804.0 )
全 国 計	117,755.9	100.0	123,488.0

出所：IBGE

表 285

牛：屠殺数（主要11州の連邦検閲済）

1,000頭

州 別	1982	1983	1984
サンパウロ	2,500.7	2,506.5	2,196.1
ミナス・ジェライス	1,474.2	1,481.7	1,339.8
リオ・グランデ・ド・スール	1,080.4	1,093.3	975.1
パラナ	977.6	868.8	683.2
マット・グロッソ・ド・スール	503.4	562.8	582.6
ゴヤス	816.3	644.3	545.7
マット・グロッソ	148.3	196.2	184.1
パラナ	87.7	156.1	184.1
エスピリト・サント	143.9	168.8	176.1
サンタ・カタリーナ	126.0	117.8	107.0
リオ・デ・ジャネイロ	329.4	273.5	81.0
小 計	8,187.9	8,069.9	7,054.8
その他の州	1,368.1	3,588.7	※
全国計	9,556.0	11,658.6	※

出所：SEPA・MA・IBGE ※資料なし

表 286

屠殺数に占める牝牛の比率（主要11州）

年度	屠殺数 1,000頭	内牝牛数 1,000頭	牝牛の割合 %
1982	8,187.9	2,787.5	34.0
1983	8,069.9	2,773.6	34.4
1984	7,054.9	2,097.2	29.7

出所：SEPA/ MA.

表 287

屠殺牛1頭当りの重量（1～6月の統計）

年度	屠殺数 1,000頭	重量 1,000トン	1頭当り平均 kg	牝牛平均 kg	牝牛平均 kg
1983	6,523.0	1,467.8	225.0	250.4	179.8
1984	5,645.5	1,260.9	223.3	244.2	178.1

出所：MA.

## ハ) 国際市場とブラジルの輸出

米国農務局の推定によると1984年度における世界の牛肉生産量は41.8百万トンで前年をわずかに上廻る規模に止まっている。世界の牛肉生産は80年以降毎年増加を続けてはいるものの、その増加率は僅少であり人口の増加に応じたものではない。これは80年代の始めを支配した世界的なリセッション経済下で消費階層の購買力が鈍ったこと、これに加えて飼料コストの上昇から牧畜生産の収益性が落ち積極的な投資が行なわれなかったことを理由としている。需要減退の中でストックが増加したため各生産国では輸出振興の措置をとって海外市場で競合し、これが国際価格の低下を招く原因となった。

世界の生産国の中では米国の生産がもっとも大きく、1984年度には世界生産の26%を占めた。これに続いてソ連、アルゼンチン、ブラジル、フランス、西独、オーストラリア等が大型の生産国に数えられる。この中でブラジルの生産量は世界生産に対して5.1%のシェアである。

世界の生産量が消費量を常に上廻っているにもかかわらず生産がすすんでいるのは、米国やEC圏においてすすめられている牛乳の減産計画が大きく影響している。世界最大の生産国である米国は82年以降牛乳の過剰生産に直面し、これを減らすための努力が集中されており、EC圏でも又牛乳減産の政策が、すでに過剰な牛肉のストックを更に増加させるだろうとの見通しである。これらに対し世界生産の増加に幾分のブレーキをかけているのがオーストラリアの乾燥による減産、すでに8年にわたって保有数の減少を続けているカナダ等がある。

牛肉の主要生産国は輸出国でもあるが、順位は異り国別ではオーストラリア、経済圏別ではEC圏が最大の輸出国となっている。ブラジルはオーストラリアに次ぐ世界的な輸出国として84年には世界貿易量の11.4%を占めた。

ブラジルの牛肉輸出は最近急速に伸びた項目の一つで、世界貿易に占める比率を79年頃の純輸入国より短期の中に大型輸出国に転じており、83年以降は南米最大の輸出国として伝統的なアルゼンチン輸出をしのぐようになった。

表 289 世界の牛肉生産量 1,000トン

国 別	1980	1981	1982	1983	1984
米 国	9,999	10,353	10,425	10,748	10,929
ソ 連	6,645	6,627	6,618	7,011	7,200
アルゼンチン	2,822	2,929	2,579	2,384	2,570
ブラジル	2,150	2,250	2,385	2,360	2,153
EC 圏	7,026	6,933	6,601	6,849	7,400
(フ ラ ン ス)	( 1,836 )	( 1,834 )	( 1,698 )	( 1,776 )	( 1,802 )
(西 独)	( 1,564 )	( 1,535 )	( 1,471 )	( 1,480 )	( 1,515 )
(イ タ リ ー)	( 1,148 )	( 1,111 )	( 1,107 )	( 1,140 )	( 1,130 )
(英 国)	( 1,102 )	( 1,059 )	( 960 )	( 1,020 )	( 1,050 )
(そ の 他)	( 1,376 )	( 1,394 )	( 1,365 )	( 1,433 )	( 1,903 )
オーストラリア	1,533	1,420	1,676	1,412	1,248
ニュージーランド	496	498	540	536	477
そ の 他	7,600	7,419	9,927	9,767	9,846
世 界 計	40,451	40,716	40,751	41,067	41,823

出所：USDA - IBGE

表 290 世界の牛肉消費 1,000トン

国 別	1980	1981	1982	1983 ※	1984 ※
米 国	10,875	11,084	11,182	11,494	11,317
ソ 連	6,995	7,009	7,025	7,095	7,300
アルゼンチン	2,374	2,410	2,059	2,020	2,070
ブラジル	2,046	1,920	2,060	2,000	2,000
EC 圏	6,762	6,725	6,543	6,464	6,545
オーストラリア	728	719	751	650	638
ニュージーランド	169	148	177	172	167
そ の 他	8,986	8,616	8,914	8,565	8,638
世 界 計	39,721	39,660	39,748	39,512	39,703

出所：USDA ※ 1984年4月の推定

ブラジルの牛肉輸出が伸びた理由としては次の事項があげられる。

- ブラジルは従来端境期のために常時20万トンのストックを形成する政策を続けてきたが、フィゲイレード政権に代って以降、ストックに対する補助的融資を中止した。
- 国内の経済リセッション、給与の抑制により国民の購買力が低下し、従来の1人当り年間消費量が20kgより16kgへと減少し、余剰分の市場が海外に求められるようになった。
- 1980年にソ連のアフガニスタン進攻に対する米国の報復手段としてソ連に対する穀物輸出を中止したため、ソ連はアルゼンチンにその供給を求め大量の契約を結ぶこととなる。このためアルゼンチンの穀物生産は250万トンより一挙に400万トンへと飛躍するが、その分牧畜活動が縮少し、保有頭数は620万頭より520万頭へと減少する。

その直後アルゼンチンはフォークランド島の領有権をめぐる英国との紛争の結果、牛肉輸出の最大の市場であった英国市場を失うことになり、これに代る供給国としてブラジルが登場することになった。現在ブラジルは英国の生肉輸入の90%近くを供給中である。

表 291 牛肉：世界の主要輸出国

国又はグループ別	1982	1983	1984	1985
E C	416	484	727	799
オーストラリア	942	767	616	660
ブラジル	398	500	510	510
ニュージーランド	366	372	288	356
アルゼンチン	522	415	250	220
米 国	115	125	152	158
カナダ	83	83	105	113
ウルグァイ	169	225	131	100
その他	1,697	1,754	1,684	1,747
計	4,708	4,725	4,463	4,663

出所：USDA, CACEX

表 292 牛肉：ブラジルの輸出実績 A 重量 トン

区分	生肉 骨つき	生肉 骨なし	冷凍 骨つき	冷凍 骨なし	コンビーフ	コンビーフ 冷凍	その他	計
1981	15.0	1,404.4	61.6	44,917.9	82,642.3	12,187.3	3,278.2	144,506.7
1982	—	1,331.6	4,035.8	89,074.0	88,657.9	12,458.5	1,596.9	197,154.7
1983	—	2,891.3	1,511.6	115,893.8	109,735.3	18,439.5	688.7	249,160.2
1984	238.9	4,253.9	164.7	110,438.8	118,034.6	22,065.0	1,090.8	256,286.7

B 金額 1,000ドル

1981	64.5	6,646.7	75.6	116,779.4	243,942.6	46,230.5	3,551.7	417,291.0
1982	—	4,358.3	4,478.9	179,450.3	206,990.8	41,757.3	1,744.7	438,780.3
1983	—	8,364.3	1,711.8	200,242.2	250,157.2	55,351.0	830.0	516,656.5
1984	513.8	13,522.0	250.7	199,623.1	244,805.7	60,624.7	1,287.0	520,627.0

関税番号： 02.01.01.01 02.01.01.02 02.01.01.03 02.01.01.04 16.02.01.01  
16.02.01.02 16.02.01.99

表 293 牛肉(冷凍骨なし)輸出実績 1984年

輸 出 先 国	重 量 1,000トン	金 額 100万ドル
英 国	14.7	27.1
イ タ リ ー	12.1	24.2
イ ラ ク	13.2	21.2
イ ス ラ エ ル	12.0	20.7
西 独	9.7	19.2
オ ラ ン ダ	9.5	18.3
エ ジ プ ト	10.9	14.8
サウジ・アラビア	6.9	12.8
ス ベ イ ン	5.0	10.9
香 港	5.5	10.2
フ ラ ン ス	2.5	4.8
シ ン ガ ポ ー ル	2.1	3.5
マ ル タ	1.6	3.1
そ の 他	4.7	8.8
計	110.4	199.6

出所：CACEX

02.01.01.04

表 294 コンビーフ：輸出実績 1984年

輸 出 先 国	重 量 1,000トン	金 額 100万ドル
英 国	53.0	110.9
米 国	27.6	58.7
イ ラ ク	9.8	19.7
プエリト・リコ	3.9	8.3
カ ナ ダ	3.3	6.6
サウジ・アラビア	3.0	6.0
エ ジ プ ト	2.7	5.5
オ ラ ン ダ	2.7	5.1
ジャマイカ	2.4	4.6
ジョルダン	1.7	3.7
トリニダード・トバゴ	1.0	1.9
リ バ ノ	0.6	1.3
バ ハ ー マ ス	0.6	1.2
そ の 他	5.7	11.3
計	118.0	244.8

出所：CACEX

16.02.01.01

表 295 牛肉の輸出単価 US\$/トン

年 度	冷凍骨なし肉	コンビーフ
1981	2,599	3,793
1982	2,014	3,351
1983	1,727	2,280
1984	1,807	2,074

出所：CACEX

d) これらのほか石油輸入の見返りとして中近東やアフリカの産油国に対する牛肉輸出が伸びたことも重要な要因であり、またコンビーフ輸出の50%以上を占める米国市場の存在も忘れることは出来ない。

表293~294にみられる通り生肉においても加工肉においても英国を最大の市場としており、その輸出額は1億4千万ドル近くに達している。またヨーロッパ、中近東諸国も重要な市場となっている。

最近の輸出推移をみると金額の増加率(84年の前年比0.7%)が量の増加率(2.8%)を下廻っているのが観察される。すなわち輸出単価の減少であり、最大の輸入市場であるEC圏内の生産増加による世界の供給過剰を反映したものである。冷凍骨なし肉及びコンビーフの輸出単価をみると表295の通り変化している。

## 二) 国内市場及び価格

84年度の牛肉生産者の受取価格は、12月の価格を前年同期と比較すると196.8%で年間のインフレ率を下廻っており、前年の上昇率356.3%(83年のインフレ率は211%)と比較して低く生産者にとって良好な年ではなかった。小売価格も又182%の調整に終っており、インフレ率はもとより生産者受取価格の上昇率以下に終わって

表 296 肥育牛牛肉生産者受取  
価格 CR/15kg

月別	1983	1984
1	4,243	19,530
2	4,424	21,121
3	4,987	21,690
4	6,437	22,250
5	6,743	28,077
6	7,024	29,590
7	9,467	33,295
8	11,042	37,930
9	15,406	52,330
10	17,035	54,740
11	17,739	54,580
12	18,295	54,310

出所：IEA サンパウロ州

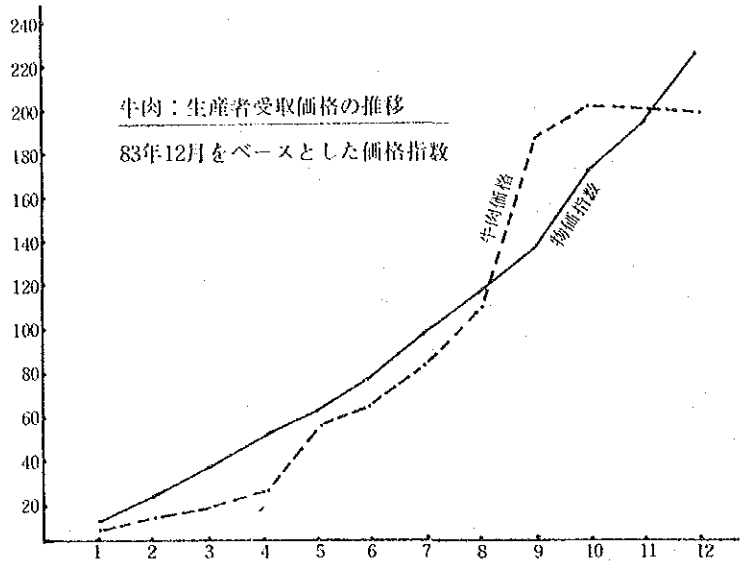


表 297 牛肉：小売価格の推移 CR/kg

月別	1982	1983	1984
1	313	595	2,318
2	321	650	2,449
3	321	699	2,496
4	336	839	2,480
5	338	855	3,109
6	373	910	3,179
7	477	1,239	3,496
8	504	1,376	4,019
9	532	1,889	5,596
10	549	1,978	5,859
11	557	2,076	5,907
12	572	2,082	5,887
年間上昇率	90.0	264.0	182.8
インフレ率	99.7	211.0	223.8

出所：IEA

る。市場の購買力減退による小売マージンの減少と解釈される。

### 3.7.2 豚

#### イ) 生産

コンジュンツラ・エコノミカ誌 (85年3月号) によると84年には830万頭 (連邦検問済) が屠殺され、567千トンの豚肉が生産された。この生産量は前年の761千トンを25.5%減少したもので供給量の減少、価格の上昇を招いた。

養豚コストにもっとも大きな比重を占めるトウモロコシ価格の動向は養豚収益の成否を決定する。従ってとうもろこし価格と豚肉価格との関係が重視されている。83年度にはこの関係が悪く養豚収益が落ちたため、屠殺が増加したのが84年の屠殺減少の理由となっている。

サンパウロ州の養豚業界についてみると、前年には天候不順と輸出先行のためとうもろこしが不足して、その価格を上げたのに加え豚肉需要の減少が加ったため養豚収益が圧迫され、多くの生産者が屠殺をいそいだ。このため通常3.5%程度であるべき雌親豚の屠殺率が20%に達した。

1983年の5月頃まで豚肉価格ととうもろこし価格の関係は安定していたが、6月以降悪化して上の状態を経過したあと、84年の2月になるととうもろこし新期収穫による価格の低下により再び上記関係が正常化している。

#### ロ) 内外市場及び価格

豚の国内消費は最近数年間、鶏肉にその場を譲っており減少を続けている。83年の全国平均は1人年間6~6.5kgの消費となっており、79年頃の9kgの消費量を下廻る。

このように消費は減少傾向にあるが、上述の通り供給量の大巾な減少により価格はほぼインフレ率に平行して推移し、大巾な価格下落はみられなかった。

海外への輸出は冷凍豚肉及び加工肉として行なわれているが加工肉の量は僅少であり、冷凍豚肉が1千万ドル程度の輸出規模となっている。

表 298 豚肉生産推移

年度	生産量 1,000トン	前年比
1981	789.7	(-) 2.8
1982	726.2	(-) 8.0
1983	761.3	4.8
1984	567.0	(-) 25.5

出所: CFP, Conjuntura Economica

表 299 冷凍豚肉の輸出推移

年度	重量 トン	金額 1,000ドル	単価 US\$/t
1981	1,197.7	2,085.5	1,745.
1982	2,621.3	4,864.6	1,856.
1983	2,319.5	3,321.9	1,432.
1984	6,267.6	11,079.5	1,768.

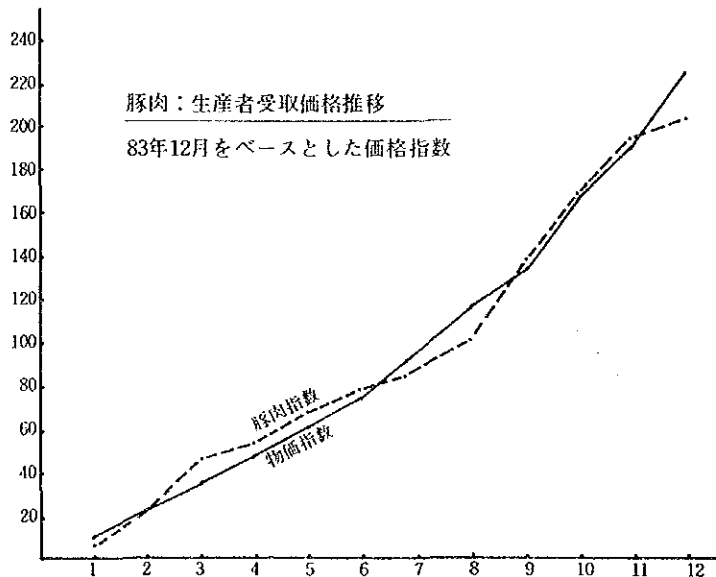
出所: CACEX

02.01.04.02

表 300 豚肉生産者受取価格  
CR/15kg

月別	1983	1984
1	4,267	15,600
2	4,411	18,828
3	4,538	21,786
4	5,004	22,890
5	5,279	25,159
6	5,694	26,480
7	6,499	27,790
8	8,141	29,901
9	10,114	35,515
10	13,625	40,250
11	14,237	43,900
12	14,880	45,030

出所: I. E. A.





### 3.7.3 鶏

1960年、養鶏界に新しい生産システムがとり入れられて以米ブロイラーの生産は増加し、70年代の中期より飛躍的な増加を続けてきた海外輸出によって更に活況を呈してきた養鶏部門も、輸出が81年を頂点として頭打ちになったのに加え、国内需要の減少、生産コストの増加と困難な条件が重なり、輸出部門は82年より鶏肉の生産は83年より下降に向っている。

肉鶏生産者協会（A P I N C O）の情報によると、全国の鶏肉生産量は83年に前年比(-)1%の1,489.4千トン

表 301 鶏肉ととうもろこし価格との関係

月別	1981	1982	1983	1984
1	2.95	2.68	3.25	2.37
2	2.64	2.83	2.73	2.68
3	2.39	3.05	2.81	2.55
4	2.37	2.82	2.90	2.38
5	2.33	2.33	2.99	2.51
6	2.47	2.40	2.68	2.61
7	2.74	2.56	2.40	2.92
8	2.94	2.82	2.09	3.00
9	2.94	2.75	2.34	3.80
10	2.91	2.66	1.91	3.12
11	2.80	2.92	2.14	2.40
12	2.54	3.21	2.05	2.19
平均	2.67	2.76	2.52	2.71

表 303 卵と飼料の価格関係

月別	1981	1982	1983	1984
1	1.68	1.84	2.08	1.49
2	1.78	2.16	1.83	2.04
3	1.84	2.75	2.03	2.18
4	2.01	2.67	2.04	2.37
5	1.87	2.13	1.81	2.46
6	1.97	2.35	2.18	2.52
7	1.96	2.05	2.11	2.50
8	2.10	2.33	1.61	2.50
9	2.12	1.93	1.98	2.81
10	1.91	1.47	1.42	2.25
11	2.05	1.44	1.42	1.75
12	1.92	1.60	1.40	1.88
年平均	1.93	2.06	1.82	2.23

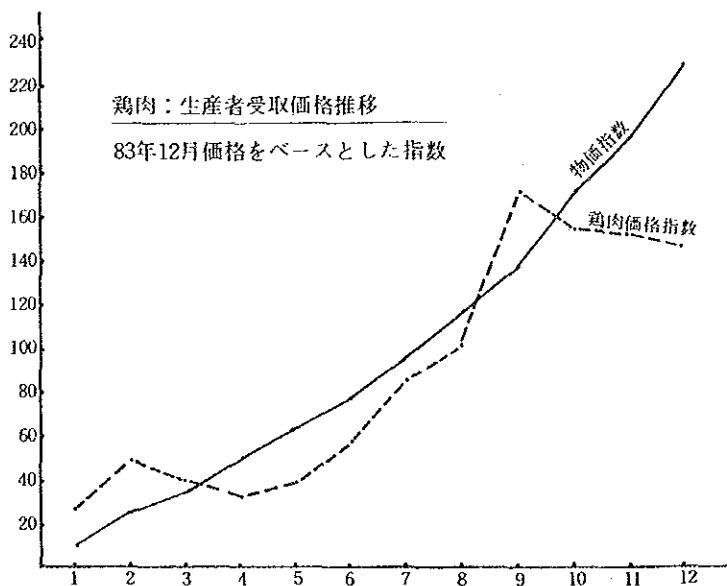
出所：IEA 鶏肉1kgの生産者受取価格で購入出来る配合飼料の量

出所：IEA 卵1打の生産者価格で購入出来る飼料のkg数

表 302 鶏肉：生産者受取価格 CR/kg

月別	1983	1984
1	155	751
2	158	865
3	202	841
4	230	797
5	264	839
6	275	937
7	279	1,095
8	311	1,203
9	436	1,640
10	510	1,540
11	595	1,490
12	601	1,462

出所：I.E.A. サンパウロ州



のあと、1984年は更に減少して1,335.9千トンに落ちた。国内の生産能力は180万トンといわれているので、84年には生産設備の24%が遊休化したこととなる。

国内生産に最大の比重を占めるサンパウロ州の養鶏業界も同様な傾向にあり、生産の減少が続いている。とくに83年度にはとうもろこし価格の高騰によって養鶏収益を落したほか、南部地方産品との競合があり、価格の低

表 304 卵：生産者受取価格  
CR/30打

月別	1983	1984
1	3,110	13,658
2	3,153	18,566
3	4,107	20,414
4	4,413	21,711
5	4,386	22,722
6	5,971	24,570
7	6,616	25,515
8	6,522	27,913
9	10,042	33,790
10	10,960	32,207
11	12,424	31,694
12	12,508	36,140

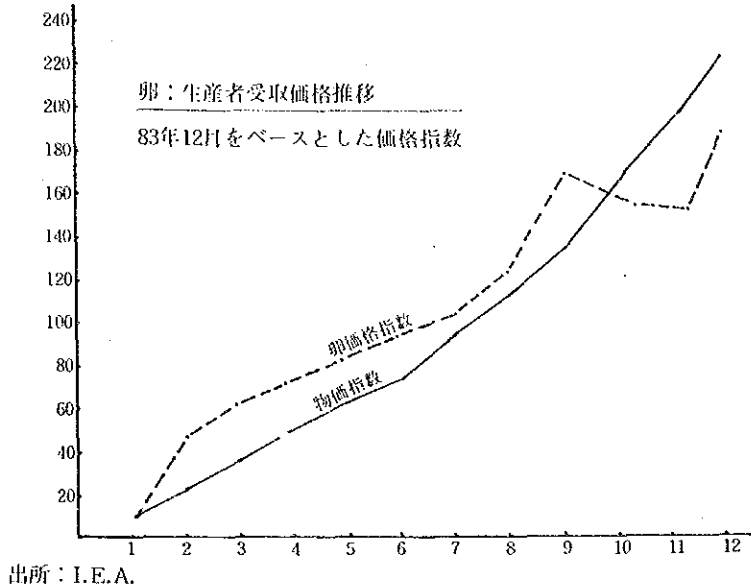


表 305 プロイラーの輸出推移

重 量		1,000トン			金 額					100万ドル
1980	81	82	83	84	1980	81	82	83	84	
167.8	293.9	301.8	289.3	280.3	206.7	354.3	285.5	242.2	263.5	

出所：CACEX

表 306 プロイラー：輸出実績 1984年

輸 出 先 国	重 量 1,000トン	金 額 100万ドル
サウジアラビア	85.2	77.2
エジプト	63.2	55.2
イラク	47.5	41.6
イラン	23.3	20.9
日本	10.5	15.1
コロンベイト	12.5	11.9
スペイン	7.9	9.3
イタリア	4.7	7.8
イエメン	6.2	5.4
オマーン	5.2	4.7
その他	14.1	14.4
計	280.3	263.5

出所：CACEX

下を招いたのが生産減少の主な理由となっている。

養鶏業界の収益指標となる鶏肉1kgの価格で何kgの飼料が購入出来たかの価格関係は、83年にどうもろこし価格の上昇によって不利に推移したあと84年には若干の回復をみた。

84年度の当初にみられた価格の回復は、牛肉価格の上昇によって鶏肉の需要が増加し値を引き上げるものであったが、物価指数と比較すると低く、9月に一時的に反撥したあと再び下降した。

他方、産卵鶏部門の方も肉鶏の場合と同様の傾向を示し、需要の減退、生産コストの増大、収益の減退を招いた。しかし生産者受取価格は前年12月をベースとした指数をインフレ率と対比すると、年間の大部分インフレ率以上のレベルにあり、また卵と飼料との価格関係も過去3年間の平均より向上している。このような価格の上昇は82年以降多くの産卵鶏生産部門が生産の縮小、又は中止によって供給態勢が減少したための現象とみられている。

## 林業部門

林業部門に関する統計

表 307

ユーカリの植林面積と植付本数

州 別	面 積 1,000ha		本 数 1,000本	
	1981	1982	1981	1982
ミナス・ジェライス	1,342.7	1,479.5	2,455.1	2,707.6
サンパウロ	717.7	728.1	1,546.3	1,546.9
マツト・グロッソ・ド・スール	385.7	406.8	737.2	772.3
リオ・グランデ・ド・スール	189.0	201.3	432.0	460.3
エスピリト・サント	149.8	149.2	209.4	214.4
バイア	94.8	120.6	184.4	234.1
パラナ	83.8	88.4	185.4	196.0
ゴヤス	64.1	68.0	118.9	128.8
サンタ・カタリーナ	41.1	49.6	92.1	112.1
その他の州	66.1	83.4	130.3	157.9
全国計	3,134.8	3,374.9	6,091.6	6,530.4

出所：IBGE

表 308

アメリカ松の植林面積と植付本数

州 別	面 積 1,000ha		本 数 1,000本	
	1981	1982	1981	1982
パラナ	493.4	534.2	1,113.6	1,192.0
サンタ・カタリーナ	263.8	275.3	528.4	539.0
サンパウロ	281.1	266.3	543.2	507.5
ミナス・ジェライス	181.8	200.3	292.2	315.2
バイア	122.8	194.1	191.3	323.2
リオ・グランデ・ド・スール	88.7	123.9	193.3	260.3
その他	141.1	155.7	215.1	236.6
全国計	1,572.7	1,749.8	3,077.1	3,373.8

出所：IBGE

表 309

## 木材、薪、木炭生産量(造成林) 1982年

州 別	木 材 1,000m <sup>3</sup>	薪 1,000m <sup>3</sup>	木 炭 1,000m <sup>3</sup>
サンパウロ	17,844.4	13,201.3	112.2
リオ・グランデ・ド・スール	8,708.7	8,848.7	27.3
パラナ	6,447.5	924.8	1.6
エスピリト・サント	2,599.9	356.6	80.3
ミナス・ジェライス	2,585.8	4,306.4	935.0
サンタ・カタリーナ	2,633.2	521.8	0.2
パラ	969.0	—	—
セアラ	207.0	90.0	—
リオ・デ・ジャネイロ	264.6	116.3	0.9
その他	106.4	198.5	0.8
全国計	42,366.5	28,564.4	1,158.3

出所：IBGE

表 310

## 木材、薪、木炭生産量(天然林) 1982年

州 別	丸 太 1,000m <sup>3</sup>	薪 1,000m <sup>3</sup>	木 炭 1,000m <sup>3</sup>
パラ	12,352.8	25.9	4,091.7
パラナ	5,691.7	29.7	7,857.7
サンタ・カタリーナ	4,339.1	39.5	10,505.7
パイア	3,977.7	152.2	19,989.3
ゴヤス	1,786.1	90.2	7,215.4
マラニョン	1,021.1	134.1	8,385.4
ピアウイ	933.9	10.9	2,086.5
マツト・グロツソ・ド・スール	878.9	66.1	1,119.6
リオ・グランデ・ド・スール	874.8	3.1	5,909.1
アマパ	873.7	0.4	95.2
アマゾーナ	662.7	4.2	3,097.0
ミナス・ジェライス	652.3	1,606.7	20,506.5
マツト・グロツソ	610.1	0.3	3,110.4
ロンドニア	581.4	3.2	104.6
セアラ	552.5	20.5	10,174.1
その他	1,193.3	312.9	18,482.2
全国計	36,982.1	2,499.9	122,730.4

出所：IBGE

10,349

3,652

表 311

## 木材の輸出実績

年度	重 量 1,000kg			金 額 100万ドル		
	木 材	加 工 品	計	木 材	加 工 品	計
1981	870.1	0.2	870.3	391.6	0.6	392.2
1982	658.7	0.1	658.8	274.3	0.3	274.6
1983	768.5	0.1	768.6	318.9	0.3	319.2
1984	803.2	0.2	803.4	330.3	0.5	330.8

出所：CAPITULO 44

## 4. 1985年の農業生産概況及び86年の作付状況

## 4.1 1985年度における農業界の動向

1985年度の一般情勢及び農業界の動向としては次の事項が特記される。

政治面では1964年の革命以降21年間にわたった軍事政権が幕を閉じ、民政に復帰した歴史的転換の年であり、経済政策面、社会政策面に国民の期待と新たな希望を与える年であった。

この民政復帰に先立ち84年を通じて行なわれた大統領直選への全国的な動きや、国民の信望を集めて選出され、就任式の前夜に発病し1月後に死去した新大統領への追悼を通じ、国民の国家に対する意識が高揚した重要な年であった。

民主政権を担当した新政府は、国民の飢餓と貧困を撲滅する社会政策があらゆる経済政策に優先することを標榜し、経済活動の成長を求めることにより国民所得の向上を図った。

経済面では軍事政権に引きつづきIMFの監督下で対外勘定の調整と、そのために必要な国内経済政策とくに金融政策面での指標が定められ、これにもとづく政策がすすめられた。

国内インフレは前年とほぼ同率の230%で推移したが、世界経済の回復の中で需要を高めた外国市場と、期待ムードの中での国内需要に支えられた工業界の景気回復は明らかとなり、失業率の低下がみられた。この傾向は必然的に商業部門にも影響し、実質的売上の増加が記録され活気をもたらした。

対外勘定の調整については、前年に引きつづき国際金融機関との交渉による債務の繰延べや新規資金の調達が行なわれたが、これらと合せ赤字の原因を作ってきた経常収支の改善を図る唯一の方法としての貿易黒字の目標が設定され、目標達成のため輸出の増進と輸入の抑制政策が継続された。

85年の貿易黒字としては年頭に120億ドルの目標が設定されていたが、年末の収支残は非公式ではあるが125億ドルと発表されており、前年に引き続き大巾な貿易黒字が達成されている。

85年に達した125億ドルの黒字は、85年の前半を支配したドル高の影響を受けて、ドルに平行するブラジル製品の競争力を弱める不利な条件下にあって輸出高は前年を下廻ったが、輸入面において最大の輸入項目である石油勘定が、国内石油生産の増加（1日当り60万バレル）や代替エネルギー源（水力発電やアルコール）の増加によって、その輸入量を減少したのに加え、国際石油価格の下落が加って輸入額が大巾に減少したことや、石油に次ぐ輸入項目の小麦では前年を倍加した記録的な国産増加により、これも輸入額を減少するなど一連の輸入減少が大きく影響して達成されたものである。

85年度の農業界は、84年に植付けられ85年中に収穫が行なわれた84/85農年と、85年の後半に植付けられ86年に収穫される85/86農年に分けられる。前者は前政権下での植付、後者は新政権下での植付けである。

85年度の農業界を特徴づけたものとして穀類の生産が史上最大の規模に達したこと、このため供給量が増大し

全般に価格が低迷したこと、そのため最低価格保証制度の利用がこれも史上最大の量に達したことなどがあげられる。

穀類の生産については80年代に入って以来5千万トン台に止まり、人口の増加に応ずる増産が行なわれていなかったが、84年には天候に恵まれたため、とくに大豆と小麦の生産が飛躍的に増大し57百万トン台へ入った。大豆は長年の15百万トンより18百万トンへ、小麦は不作であった前年を112%も上廻る増産であった。

国内食糧の生産については、すでに前政権の時代よりその振興に意が用いられてきたが、常に輸出作物に優先され、これら輸出作物が生産を伸ばしてきたのに対し国内食糧の生産は減退し、国内の供給態勢を悪化させていた。国内供給量の減少は価格の上昇につながり、農産物価格の上昇は物価全体を引上げ大きなインフレ要因として作用していた。

新政府はこの様な状況を改めて国内食糧の豊富な供給によるインフレ要因の除去、低所得階層の生活費への負担の軽減、更に国内食糧生産に従事する小農業者の生活条件の向上を重点政策とし、その最初の施策として85年収穫に対する最低価格保証制度による買上げ、又は現物担保融資の資金手当を行ない、資金量不足のため最低価格以下での販売を余儀なくした前年の例を改めた。この政策は資金需要を伴ないインフレにネガティブな影響を与えたものの、もしこの資金手当がなかった場合、大量の農産物が最低価格以下で販売され生産者は大きな被害を蒙った筈であり、当然の政策とはいいながら価格上の損害を回避して生産者を保護した政策は、農業界の新政府に対する信頼を高め、以後の農政推進に良好な影響を与えたことは確かである。

1985年度に実施された最低価格保証制度によるEGF(現物担保貸付)及びAGF(政府の買上げ)は表312に示す通りで、EGFでは前年の6倍にまたAGFは21倍に拡大しており、その取扱量の大きさが示されている。

表 312 EGF及びAGFの推移 Cr\$ 100万

年 度	EGF	AGF
1983	670,998	124,806
1984	943,024	362,168
1985	6,723,839	7,930,023

出所：CFP

表 313 85/86農年に対する融資枠 (VBCに対する%)

作物別	零細農、小農及び グループIの組合	中 農		大 農 及 び グループIIの組合
		グループ I	グループ II	
綿	60	60	40	40
落 花 生	80	80	60	60
陸 稲	80	80	60	60
水 稲	80	80	60	60
コ コ ア	60	60	40	40
コ ー ヒ ー	75	75	75	55
フ ェ イ ジ ョ ン	80	80	60	60
マ ン ジ ョ カ	80	80	60	60
と う も ろ こ し	80	80	60	60
大 豆	60	60	40	40
ソ ル ガ ム	80	80	60	60
小 麦	80	80	60	60
そ の 他	80	60	40	40

出所：BACEN MANUAL DE CREDITO RURAL

この様に新政府が直面した最初の問題としての収穫物の販売融資は何とか切り抜けたものの、金融引締の政策下で農業部門のみに特別な資金があるはずはなく、次期農年に対する生産費融資制度では前年とほとんど変わらない政策が継続されている。すなわち農業融資の利息はコレソント十年利3%、融資枠は内国食糧に対して優先的な取扱いをする線が継続されることとなった。この融資面において前年と異った唯一の事項は前年、零細農、小農及びグループIの協同組合（組合員構成が70%以上零細農と小農によっている組合）のみがVBC（営農費基準額—融資の基準とされる）の80%までの融資を受けることが出来るとしていたものを、グループIの中農（年間生産高が2,000 MVRを超えないもの）にまで拡大されたことである。

85/86農年に対する最低価格保証制度については生産奨励のため最低価格を高目に設定した場合、生産量が増加して市場価格が低下すると、ほとんどの作物について最低価格が市場価格を上廻り、EGFやAGFに集中することとなり85年のような大きな資金需要を起す問題があるため、85/86農年に対しては慎重なとりあつかいが行われており、前年度よりも少い調整率に終わっている。

84/85年の最低価格と比較してインフレを上廻る率で設定されているのは、カジュー・ナット、サイザル麻、ジュート及びマルバ、カルナウーバ、ラミー及びびじゃがいも種いもで米、フェイジョン、とうもろこし等の基礎

表 314 85/86農年の最低価格保証制度

作物別	単位	基準価格 CUS		調整率 %	調整期間 (ORTNによる調整期間)
		84/85	85/86		
陸 稲	60 kg	21,600	63,000	191.7	85年8月～86年4月
水 稲	50 "	21,400	61,200	186.0	全 上
フェイジョン	60 "	54,200	155,000	186.0	85年8月～85年12月
とうもろこし	60 "	13,000	37,200	186.2	85年8月～86年4月
マンジョカ	1トン	51,800	164,000	216.6	全 上
ソルガム	60 kg	11,000	31,620	187.5	全 上
綿 実	15 "	12,000	33,840	182.0	全 上
大 豆	60 "	20,000	59,040	195.2	全 上
落 花生	25 "	15,000	39,000	160.0	85年8月～86年1月
ヒ マ	60 "	20,600	70,500	242.2	85年8月～86年4月
ヒ マ ワ リ	40 "	12,000	36,000	200.0	85年8月～85年12月
カジューナット	1 "	700	2,755	293.6	85年8月～85年11月
カルナウーバ	1 "	1,100	3,815	246.8	
サイザル	1 "	380	1,458	283.7	
ラ ミ	1 "	800	2,968	271.0	
ま ゆ	1 "	3,500	10,911	211.7	
ジュート及びマルバ	1 "	670	2,400	258.2	85年8月～86年6月
ソ バ	1 "	244	732	200.0	85年8月～85年12月
ジュート種子	1 "	1,157	4,000	245.7	85年8月～86年6月
じゃがいも種子	30 "	15,000	51,000	240.0	85年8月～85年11月
マルバ種子	1 "	2,000	6,000	200.0	

出所：CFP

食糧はむしろ低い調整率である。

次期農年に設定された最低価格保証制度で振興策とみられるのは、基準価格のインフレに合せた調整期間を国内食糧の米、マンジョカ、とうもろこし、ソルガム、フェイジョン及びじゃがいもの種いもについて延期したことで穀物の場合は、当初8～2月間の調整期間であったものが前年に8～4月に延長され、これを更に8～6月の調整期間とした。

農業生産資材については供給上の問題は発生していないが、金利の上昇を中心とした資材コストの増加が目立っており、生産者受取価格との関係を悪化させている。

肥料部門では国内生産の増加がみられた反面、価格も大巾に上昇、実質価格で24%まで達した肥料もあった。肥料の消費は伸びており760万トンと推定されている。肥料部門で特筆されるのはセルジッペ州カルモポリス郡でカリの国産が開始されたことで、年間60万トンの生産能力により、従来全面的に海外に依存していたカリの輸入は減少していく見通しである。

農業の消費も85年に増加し、85年の上半期を84年の同期と比較すると6.6%の増加があった。ただしこれは大豆作において異常に発生した害虫（LAGARTO）と綿作におけるビクード（BICUDO）の駆除のための需要であり、他の作物の場合農業消費の増加はみられていない。とくに年度後半における長期乾燥のため大豆や綿作が他の作物に切換えられたため、年末にかけて農業消費はむしろ減少気味であった。

84年に大巾に生産を回復したトラクター業界では85年に70年代に達した記録に戻るものと期待されていたが、一部作物の価格関係（生産者受取価格/トラクター価格）が悪化したため売上げは伸びず、事実上84年と同じレベルの実績に終わったものと思われる（注：85年7月までの統計で前年の国内販売量34,066台に対し34,076台の実績）。とくに機械を多く使用する大豆、砂糖キビ、綿における価格関係の悪化が影響し、価格関係を好転した米、じゃがいも、コーヒー、オレンジ、トマト、とうもろこし等のトラクター（これらの作物は前記作物に比して使用度が低い）需要をもってしてもカバー出来なかった形である。トラクター需要が喚起されるためにはトラクターを多く用いる作物の価格上昇を必要とする。

公共支出の削減、金融予算の引締め政策下で資金需要を伴う新規の開発計画は実施されていない。85年中に特記される農業開発に関連する政策としては85年10月に発表された農地改革プランがある。ブラジルの農地所有形態は小面積を多数の農民が耕やし、小数の地主が所有する広大な農地が開発されることなく放置されてきた極めて前時代的な形態が続き、国の農業開発を阻害する大きな問題であった。過去歴代の政府はこの問題に取り組み、軍事政権下では農務省管下に農地改革院を設置して徐々に農地の整備がすすめられてはきたものの、大農場主は地方の実力者であり、政治家であり、政府の高官も又大農場出身のものが多いため簡単に解決出来る問題ではなく、旧態依然とした所有形態が継続していたものである。

民政に復帰し、社会政策を主眼とする新政府はあらためて農業開発の基本としての農地改革の重要性を認識し、農地改革開発省を新設すると共に農地改革案を国民に諮問し、討議を重ねた結果、第1次農地改革計画を発表する運びとなったものである。同計画案によると1989年までの4年間を第1期の計画実施期間とし、140万家族の農民に土地を与えるために必要な遊休地の接収、国有地の分譲を行なう計画となっている。

農地改革案の発表后、遊休農地に手を入れる地主が増えており（注：生産を行っている土地は接収の対象とされない）、新しい作付けや農地の売出しなどがあり、農地価格の動向にも影響するといわれており早くもその反響が現われている。農地改革の成否は新政権の今後の方向を決定する重要な鍵であると同時に、ブラジルの農業開発の方向を決定づけるものでもあり注目されている。

#### 4.2 1985年度の農業生産状況

1985年度の農業生産統計はいまだ最終的なものではなく、IBGE（ブラジル地理統計院）が85年11月に行った調査結果を現時点（86年2月）での最新データとしている。したがって以下に用いる数字は今後変更され得る



ものであるが、11月までには大半の作物が収穫を終了しているので大勢に変化はあり得ない。

IBGEの統計による85年の収穫は次の状況であった。

1) 穀類及び油脂原料作物

農業生産の指標とされる穀類及び油脂原料作物(ブラジルでは一般にグラウン〜Grão〜と呼んでいる)の1985年度における生産は35.8百万ヘクタールの面積で行なわれ、57百万トンの生産をあげた。この生産規模は面積では82年(36,659千ha)に劣るが、生産量では過去最大の生産量であった前年を11.8%増加し、長年にわたって停滞していた5千万トン生産のラインを一挙に6千万トン近くに引きあげたものである。

85年の大巾な生産増の要因となったのは大豆を始めとする油脂原料作物の前年比18.9%の伸びと、穀類の中では前年を倍加した小麦の生産増によっている。以下主要作物の状況は次の通りであった。

イ) 大豆

大豆の生産増加は成育期間中を支配した気候条件に支配されたもので、平均単収が前年の1.650kg/haより1.800kg/haへと向上したのを大きな理由としている。栽培面積ではすでに限界に達している南部地方の伸びが緩慢であるのに対して、セラード地帯を含む中西部地方の増加が目立っており、単収も高い水準にあるところから今後の増産が予想される。セラード地帯における前年比増加率はマツト・グロソ州において49%、ミナス・ジェライス州59%、ゴヤス州60%、マツト・グロソ・ド・スール州28%であった。1985年にみられた問題点はドル高を理由とする国際市場の買控えで、国際価格が落ち国内価格にも影響したことである。国際市場の回復は当面期待出来る状況になく、政府も国内生産の増加にブレーキをかける

表 315

1985年：穀類及び油脂原料作物の収穫状況

区 分	収穫面積 1,000ha			生産量 1,000トン			単収 kg/ha	
	83/84	84/85	増減%	83/84	84/85	増減%	83/84	85/86
A) 穀 類								
とうもろこし	12,205	11,798	- 3.3	21,174	22,006	3.9	1,735	1,865
米	5,356	4,754	- 11.2	9,022	9,002	- 0.2	1,684	1,893
小 麦	1,741	2,639	51.6	1,956	4,149	112.1	1,123	1,572
フェイジョン	5,309	5,325	3.0	2,614	2,568	- 1.8	492	482
ソルガム	151	163	7.9	301	258	- 14.3	1,993	1,583
大 麦	73	106	45.2	77	144	87.0	1,055	1,358
からす麦	120	142	16.7	133	173	30.0	1,108	1,213
ライ麦	3	13	333.3	3	14	366.7	1,000	1,077
小計	24,958	24,940	- 0.1	35,280	38,314	8.6	—	—
B) 油脂作物								
大 豆	9,417	10,150	7.8	15,536	18,274	17.6	1,650	1,800
落花生	150	193	28.7	247	339	37.4	1,647	1,756
ヒマ	413	495	19.9	225	416	84.9	545	840
小計	9,980	10,838	8.6	16,008	19,029	18.9	—	—
合 計	34,938	35,778	2.4	51,288	57,343	11.8	—	—

出所：IBGE

方針である。

ロ) 小麦

大豆と共に85年の増産を決定づけた小麦の生産拡大は大豆作の価格が悪く、これを裏作の小麦で挽回しようとした動きが、生産者の満足を得た政府の買上げ価格(注:全量政府が買上げる)Cr\$ 1,100千/俵に支えられ、栽培面積が前年を50%以上拡大したのに加え、天候に恵まれたための増産で史上最高のレベルとなった。栽培面積そのものは過去にも1976年の350万ヘクタール79年の380万ヘクタール、80年の310万ヘクタール等、85年を上廻った年があったが、その都度天候不順のため生産が伸びず、過去に300万トンを超す生産実績はなかった。85年には最大の生産地帯を持つパラナ州の単収が1haあたり2トンに達したのが決定的な増産の要因となった。

小麦は単独の項目で石油に次ぐ大きな輸入項目であるだけに、国内生産の増加は輸入の減少につながり85年貿易収支の黒字目標達成に大きく貢献している。

ハ) とうもろこし

国内最大の栽培面積を持つとうもろこしの場合も栽培期間中の好天候により単収を伸ばしており、面積の減少にかかわらず生産量はわずかながら増加した。

養鶏、養豚業界の需要減退によりとうもろこしは供給過剰気味であり、価格は年間を通じて低迷した。このためAGFによる政府への売込みが多くを占め、CFPの買上げは9月末までに300万トン近くに達した。

ニ) 米

基礎食糧としての米は再び国内消費量を下廻る生産量に終わった。国内生産量は940万トンと推定されており、国内生産の不足分は政府在庫米の放出によって賄われている。米の場合もとうもろこしの場合と同様に年間を通じて価格は低く、政府への売込みや現物担保の融資が増加した。

ホ) フェイジョン

面積では前年を3.0%増加したが単収の減少により生産量は1.8%の減少となった。生産量は257万トンで国内消費量として推定されている250-260万トンに見合う数量である。このように生産量と消費量とが均衡しているにもかかわらず価格は低く、生産者価格、小売価格共85年を通じて低目であった。

2) 工業原料作物

砂糖キビ、マンジョカ、綿及び煙草葉、その他の繊維作物による工業原料作物の収穫面積は前年を7.5%増加し、ほぼ1千万ヘクタールに達している。生産量の場合は面積の増加率を上廻る8.6%の上昇であった。

イ) 砂糖キビ

毎年生産記録を更新している砂糖キビは85年も又前年を8.3%上廻る新しい記録を作っている。このような生産の継続した増加は、砂糖キビが単年性の作物ではなく1回植付けると3-4年間の生産を可能とするため面積が固定していること、及び国家アルコール計画に支えられた安定作物であることによっている。砂糖キビを原料とする砂糖の生産は885万トン(85年の目標は850万トン)、アルコールの場合は90億6千リットル(目標92億5千リットル)であった。

砂糖部門にみられる問題点は国際市場が供給過剰のため価格が低く、ついにトン当たり100ドルを割っており、ブラジルは輸出すればする程国の補助が増大する形で、むしろ外国より輸入して売買契約済みの輸入国側への約束を果たす方が得ではないかなどの意見すら出ている程である。このため今後の方針としては砂糖の生産を縮小し、その分アルコールの生産を増加する予定となっている。しかしアルコールの場合も又国内消費を現在以上に増やす余地は少なく海外市場への輸出が不可欠の問題となる。現在米国に対するアルコール輸出の可能性が考えられているが、米国のアルコール生産部門よりの圧力があり簡単に行く問題ではない。そこで製品としてではなくアルコール加工前(MEL RICO)の状態での輸出することに

表 316

1985年：工業原料作物の生産状況

区 分	収穫面積 1,000ha			生産量 1,000トン			単収 kg/ha	
	83/84	84/85	増減%	83/84	84/85	増減%	83/84	84/85
砂糖キビ	3,661	3,821	4.4	222,716	241,252	8.3	60,834	63,138
マンジョカ	1,815	1,875	3.3	21,289	23,278	9.3	11,729	12,415
綿	3,104	3,594	15.8	2,160	2,854	32.1	696	794
煙草	285	268	- 6.0	415	410	- 1.2	1,456	1,530
サイザル蘇	320	333	4.1	225	253	3.9	703	760
マルバ	55	42	- 26.0	54	42	- 22.2	982	1,000
ジュート	21	21	—	19	20	5.3	1,000	952
ラミー	5	5	—	10	10	—	2,000	2,000
計	9,266	9,959	7.5	246,888	268,119	8.6		

出所：IBGE

についての検討が行なわれている。

次農年に対する I A A (砂糖アルコール院) の生産計画は砂糖を 775 万トン、アルコールを 11 億リットルとしているが、最近国際市場にみられる石油価格の下落という新しい事態の前に、ブラジルの国家アルコール計画も見直しを必要とする時期に来ている。

#### ロ) 綿

84/85 農年の綿作は植付前の価格に刺戟された面積の増加により生産量を増やしており、繰綿にして約 100 万トンに相当する原料生産が行なわれた。

綿の価格は世界的な増産のために低く、85/86 農年についても価格好転の見通しが少ないため、政府は国内の綿栽培を縮小したい意向である。

#### 3) 嗜好作物

コーヒーの生産は 1 年毎に増産と減産を繰り返えるのを特徴としており、85 年は前年の減産のあとをついで増産の年となっている。面積にほとんど変化がないのに対し生産量は 29.2% の増加であった。

85 年度のコーヒー部門は年頭と年末にみられた価格の上昇を特徴としている。年頭の高値は 3 月頃に発生したものの一時的なものでその直後下降しているが、10 月頃より開始した値上りは年末にかけて上昇し 86 年の 1 月も値上りを続けた。これはブラジルの生産地帯が異常な長期乾燥に見舞われて減産の予想が確実視されたことや、10 月に開催された国際コーヒー協定が生産国側に有利に展開したことなどを理由とするものであり、この国際価格は国内価格に反映し、伝統的なブラジル人のコーヒーの習慣がおびやかされる程度の価格高騰となった。すなわち 85 年 10 月に 1 俵 Cr\$ 500 千であったものが 11 月には Cr\$ 1,000 千、12 月には Cr\$ 2,000 千を越え 86 年に入ると Cr\$ 4,000 千に近い高騰ぶりであった。このため生産地帯にコーヒーブームが出現したのはいうまでもなく、コーヒー苗の価格も高騰したと報じられている。

ココアの場合も生産を増加しており、数年前より被害を受けていた病害 (Podridão Pardo 褐色腐敗病) から立直っている。雨期と乾期の 2 回に分けられる収穫はいずれも良好で、生産量もほぼ同等の各 300 万俵相当であった。

表 317

## 1985年：嗜好作物の生産状況

区 分	面 積 1,000ha			生産量 1,000トン			単収 kg/ha	
	83/84	84/85	増減%	83/84	84/85	増減%	83/84	84/85
コ ー ヒ ー	2,452	2,483	1.3	2,679	3,462	29.2	1,093	1,394
コ コ ア	609	635	4.3	345	415	11.9	567	654
グ ャ ラ ナ	7	8	14.3	1	1	—	—	—
計	3,068	3,126	1.9	3,025	3,878	28.2	—	—

出所：IBGE

## 4) 果実及び野菜類

果実を代表するオレンジの生産は、80年以降上昇を続けており85年も新しい記録を作っている。85年には米国フロリダ州の降霜はなく価格は下降しているが、前年の好況から生産者に十分な投資能力が出来、生産資材の購入、行き届いた管理が行なわれた結果、単収が向上したための現象である。

前年の好況から生産地帯では地価が高騰し新規植付けが急速にすすんでいるが、世界的にも新しいオレンジ園造成（カリブ海諸国等）がすすんでおり、フロリダ州に定期的な降霜がない限り世界の生産が飽和状態になる危険性をひそめており、困難な局面に立たされることが予測される。

その他の主要果実もすべて前年比生産増加であった。

野菜類では主要3品目の中、じゃがいもと玉ねぎが減産、トマトが増産であった。価格はじゃがいもが生産の減少にかかわらず品質を落したため低く、生産収益が圧迫された。これに対し玉ねぎの方は需給関係がくずれて3月以降価格の高騰をみており、この時期の出荷者に多大の利益をもたらした。

以上85年中に収穫された84/85農年の状況を概観したが全般に生産が増加し、とくに穀類の増産はインフレの昂進を抑制する一つの手段として役立ち、その安価供給は社会政策を重視する新政権にとって極めて幸先のいい年であったといえる。

表 318

## 1985年：果実及び野菜類の生産状況

区 分	面 積 1,000ha			生産量 1,000トン			単収 kg/ha	
	83/84	84/85	増減%	83/84	84/85	増減%	83/84	84/85
果実類								
オ レ ン ジ※	632	664	5.1	64,613	71,282	10.3	102,235	107,352
パインアップル※	32	37	15.6	641	763	19.0	20,031	20,621
ブ ド ー	57	58	1.8	603	718	19.1	10,579	12,379
パ ナ ナ※※	396	422	66	470	485	3.2	1,187	1,149
計	1,117	1,181	5.7	—	—	—	—	—
野菜類								
じゃがいも	172	156	- 9.3	2,172	1,979	- 8.9	12,627	12,686
ト マ ト	52	54	3.8	1,820	1,944	6.8	35,000	36,000
玉 ね ぎ	69	57	17.4	718	633	- 11.8	10,405	11,105
計	293	267	- 8.9	4,710	4,556	- 3.3	—	—

出所：IBGE ※生産量は100万個、単収はヶ/ha ※※生産量は100万房、単収は房/ha

しかしながら85年の収穫を終り、85/86農年の植付けが開始された頃より国内の主要生産地帯の南東・南部地方が異常な長期乾燥に見舞われ、牧草の不足による牧畜生産への被害や発芽不良のための播直しなど深刻な状態にいたり、コーヒー等主要農産物の減産が確実視され、すでに価格の高騰すらみている。この被害により次年度には約10億ドルの食糧輸入が必要とみられている。他方、輸出農産物の方はコーヒーを除くと砂糖、オレンジ、大豆のいずれも価格上昇の見通しは少なく、輸出額減少の見込みこそあれ増大は期待薄である。85年の長期乾燥に始った85/86農年は84/85農年とは逆に穀類生産の減少、これに伴う価格の上昇、食糧輸入による外貨の流失、輸出の減少等が予想されており、新政権にとって極めて困難な年となる見通しである。

#### 4.3 1985年の農産物貿易概況

現時点(86年2月)で発表されている貿易統計は85年11月までのもので、年間を通じた統計は公式に発表されていないが、新聞情報によると85年の輸出は25,639百万ドル、輸入は13,189百万ドル(いずれもFOB)で差引き12,450百万ドルの黒字が達成されている。85年の黒字目標は120億ドルであったのでこれを達成したことになる。

全体的な傾向として輸出は84年を頂点として後退したが、輸入の方は前年を更に減少しており、その差によって得られた貿易黒字であった。

ブラジルの関税分類の中、1)動物及びその製品、2)植物及びその製品、3)動植物油、4)加工食品、5)皮革、6)木材、7)繊維類を広義の農業部門として、その輸出入推移をみると85年11月までの統計では表219の通り、輸出において前年比重量(+) $8.7\%$ 、金額(-) $11.2\%$ 、輸入では重量(-) $7.4\%$ 、金額(-) $12.5\%$ という数字が出ている。輸出量が増えて金額が減ったのは輸出単価の減少であり、大豆、砂糖、オレンジ・ジュース、肉類等主要品目の価格下落が影響したものである。ブラジルの輸出に大きな比重を占めるコーヒーも又重量の減少に加え単価の下落によって輸出金額を落している。これは上半期を支配した低調な国際相場に影響されたもので、年末にみられた価格高騰の影響は86年に繰越されることとなる。政府は乾燥のために86年に必要とする穀物輸入代金は、コーヒーの値上り分によって支払い得るものとの見方をもっている。

一方、輸入面では前年比重量で(-) $7.4\%$ 、金額で(-) $12.5\%$ となっており、前年を1億6千万ドル減少した輸入に止まった。85年度の農産物輸入の減少にもっとも大きく影響したのは小麦における約2億ドルの輸入減であり、国内生産の増加を反映したものであった。

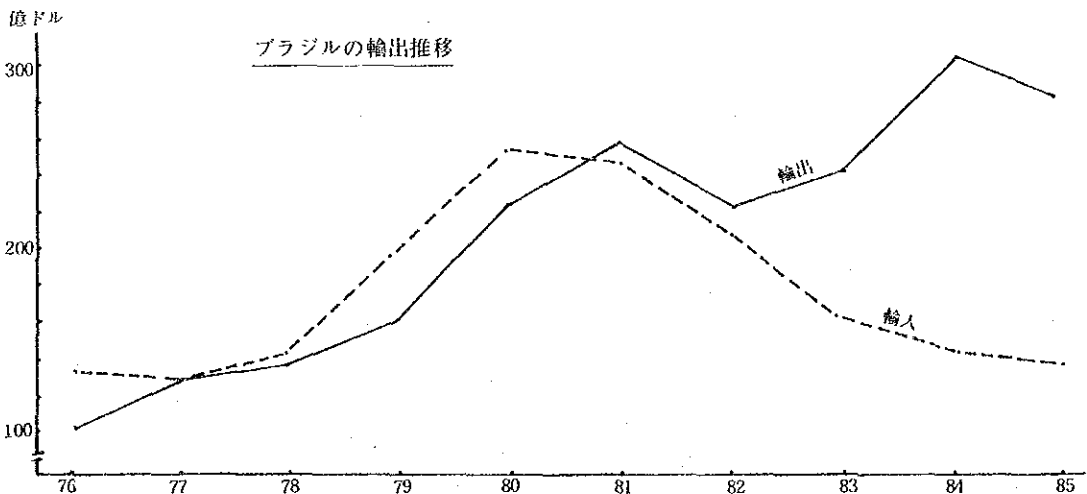


表 319

輸出実績対比 (1984年、1985年) 1~11月間

区 分		重 量 1,000トン			金 額 US\$100万 CIF		
関税番号	品 目	1984	1985	増減	1984	1985	増減
輸 出	動物及びその製品						
	肉 類						
02.01.01.04	牛 肉(冷凍)	102.4	130.2	27.1	184.5	239.0	29.5
02.02.01.02	ブ ロ イ ラ ー( )	252.8	250.6	(-) 0.9	238.8	219.4	(-) 8.1
	そ の 他 の 肉 類	39.5	46.9	18.7	57.9	62.2	7.4
Capítulo 02	小 計	( 394.7)	( 427.7)	8.4	( 481.2)	( 520.6)	8.2
	そ の 他	( 55.9)	( 76.5)	36.8	( 177.0)	( 175.8)	(-) 0.7
Ceção I	計	450.6	504.2	11.9	658.2	696.4	5.8
	植物及びその製品						
Capítulo 06	苗及び花卉類	( 2.8)	( 3.5)	25.0	( 5.2)	( 5.6)	7.7
Capítulo 07	野 菜 類	( 25.4)	( 24.2)	(-) 4.7	( 9.9)	( 9.1)	(-) 8.1
	果 実 類						
08.01.02.01	バ ナ ナ	93.8	90.6	(-) 3.4	14.7	14.6	(-) 0.7
08.01.05.02	ブラジルナット	12.1	17.9	47.9	10.8	14.0	29.6
08.01.05.03	〃	6.7	6.6	(-) 1.5	12.4	10.3	(-)16.9
08.02.01.00	オ レ ン ジ	49.0	75.0	53.1	11.3	18.6	64.6
	そ の 他	43.4	51.9	19.6	72.2	107.2	48.5
Capítulo 08	小 計	( 205.0)	( 247.4)	20.7	( 121.4)	( 164.7)	35.7
	コーヒー、茶類						
09.01.01.00	コ ー ヒ ー(豆)	940.8	831.4	(-)11.6	2,358.9	1,931.1	(-)18.1
09.04.01.01	ピメンタ黒	25.7	18.2	(-)29.2	47.7	52.2	9.4
09.04.01.02	〃 白	3.1	1.9	(-)38.7	9.8	7.0	(-)28.6
	そ の 他	31.1	82.4	164.9	48.3	154.3	219.5
Capítulo 09	小 計	( 1,000.7)	( 933.9)	(-) 6.7	( 2,464.7)	( 2,144.6)	(-)13.0
	穀 類						
10.05.02.00	とうもろこし	178.2	0.4	(-)99.8	23.6	0.3	(-)98.7
	そ の 他	37.4	15.0	(-)59.9	5.7	4.1	(-)28.1
Capítulo 10	小 計	( 215.6)	( 15.4)	(-)93.0	( 29.3)	( 4.4)	(-)85.0
Capítulo 11	粉末及び澱粉	( 158.7)	( 78.7)	(-)50.4	( 18.8)	( 9.0)	(-)52.1
	油 脂 作 物						
12.01.04.00	大 豆	1,560.9	3,495.3	123.9	454.0	763.5	-68.2
	そ の 他	15.4	29.7	92.8	16.0	18.9	18.1
Capítulo 12	小 計	( 1,576.3)	( 3,525.0)	123.6	( 470.0)	( 782.4)	66.5
	そ の 他	( 21.0)	( 22.1)	5.2	( 8.2)	( 8.2)	—
Seção II	計	3,205.5	4,850.2	51.3	3,127.5	3,128.0	—
	動 植 物 油						
15.07.01.01	大 豆 油(粗油)	793.0	518.7	(-)34.6	550.6	330.7	(-)39.9
15.07.01.03	落 花 生 油( )	13.8	55.9	305.1	12.8	45.4	254.7
15.07.02.01	大 豆 油(精製)	89.7	414.0	361.5	71.1	260.2	266.0
15.07.02.02	綿 実 油( )	90.3	109.9	21.7	69.7	67.8	(-) 2.7
15.07.02.11	マ モ ナ 油( )	55.4	73.5	32.7	58.5	46.6	(-)20.4
	そ の 他	66.9	77.8	16.3	60.1	67.3	12.0
Capítulo 15	小 計	( 1,109.1)	( 1,249.8)	12.7	( 822.8)	( 818.0)	(-) 0.6
Seção III	計	1,109.1	1,249.8	12.7	822.8	818.0	(-) 0.6

	加工食品							
	肉、魚肉調整加工品							
16.02.01.01	コーン・ビーフ	108.3	102.5	(-) 5.4	224.7	196.3	(-)12.6	
16.02.01.02	その他	20.8	14.9	(-)28.4	57.3	39.7	(-)30.7	
Capítulo 16	小計	( 141.2)	( 127.7)	(-) 9.6	( 310.5)	( 261.5)	(-)15.8	
	砂糖及び製品							
17.01.01.01	結晶糖	289.2	262.3	(-) 9.3	45.9	27.4	(-)40.3	
17.01.01.02	粗糖	1,289.9	953.6	(-)26.6	275.5	155.4	(-)43.6	
17.01.02.00	精製糖	1,162.7	1,066.9	(-) 8.2	204.6	151.6	(-)25.9	
17.03.01.02	糖蜜	326.5	155.7	(-)52.3	20.4	7.0	(-)65.7	
	その他	66.7	208.2	212.1	22.8	38.1	67.1	
Capítulo 17	小計	( 3,144.0)	( 2,646.7)	(-)15.8	( 569.2)	( 379.5)	(-)33.3	
	ココア及び加工品							
18.01.01.00	ココア(豆)	100.2	155.9	55.6	233.6	326.7	39.8	
18.03.01.00	リコール	61.5	60.7	(-) 1.3	179.1	160.0	(-)10.7	
18.04.00.00	ココアバター	32.1	39.1	21.8	151.2	185.3	22.5	
	その他	67.7	64.6	(-) 4.6	75.8	57.1	(-)24.7	
Capítulo 18	小計	( 261.5)	( 320.3)	22.5	( 639.7)	( 729.1)	14.0	
Capítulo 19	穀類調整加工品	( 13.2)	( 4.7)	(-)64.4	( 10.0)	( 3.6)	(-)64.0	
	野菜、果実調整加工品							
20.07.01.05	オレンジ濃縮ジュース	775.9	430.2	(-)44.6	1,182.4	686.5	(-)42.0	
	その他	60.4	56.2	(-) 7.0	56.5	53.0	(-) 6.2	
Capítulo 20	小計	( 836.3)	( 486.4)	(-)41.8	( 1,238.9)	( 739.5)	(-)40.3	
	その他の加工品							
21.02.01.01	インスタント・コーヒー	37.8	31.2	(-)17.5	238.1	203.5	(-)14.5	
	その他	17.2	25.5	48.2	34.1	45.1	32.2	
Capítulo 21	小計	( 55.0)	( 56.7)	3.1	( 272.2)	( 248.6)	(-) 8.7	
	飲料、アルコール、酢							
22.08.	アルコール	672.9	303.6	(-)54.9	180.0	86.1	(-)52.2	
	その他	12.2	17.0	39.3	5.7	6.9	21.0	
Capítulo 22	小計	( 685.1)	( 320.6)	(-)53.2	( 185.7)	( 93.0)	(-)49.9	
	搾油粕ほか							
23.04.05.01	大豆粕	7,076.8	8,054.7	13.8	1,372.2	1,089.3	(-)20.6	
	その他	1,317.3	1,384.4	5.1	122.6	105.3	(-)14.1	
Capítulo 23	小計	( 8,394.1)	( 9,439.1)	12.4	( 1,494.8)	( 1,194.6)	(-)20.1	
Capítulo 24	煙草	172.0	186.7	8.5	432.4	426.6	(-) 1.4	
	小計	( 172.0)	( 186.7)	8.5	( 432.4)	( 426.6)	(-) 1.4	
Seção IV	計	13,702.6	13,588.9	(-) 0.8	5,153.3	4,075.8	(-)20.9	
Seção VIII	皮革及加工品	45.3	47.8	5.5	263.4	237.9	(-) 9.7	
Seção IX	木材及加工品	736.3	710.6	(-) 3.5	301.1	269.8	(-)10.4	
	繊維類							
Capítulo 50	絹	1.8	1.7	(-) 5.6	33.1	29.7	(-)10.3	
Capítulo 53	羊毛	15.4	11.9	(-)22.7	59.4	45.5	(-)23.4	
Capítulo 54	ラミ	5.3	3.9	(-)26.4	25.9	21.3	(-)17.8	
Capítulo 55	綿	179.7	185.0	2.9	435.8	345.1	(-)20.8	
57.03	ジュート	0.3	1.7	466.7	0.2	1.3	550.0	
57.04	サイザル	75.6	84.6	11.9	26.9	26.7	(-) 0.8	
59.04.03.00	その他	107.5	102.4	(-) 4.8	60.5	49.3	(-)18.5	
	計	385.6	391.2	1.4	641.8	518.9	(-)19.2	
	合計	19,634.9	21,342.7	8.7	10,968.1	9,744.8	(-)11.2	

表 320

輸入実績対比 (1984年、1985年) 1~11月

区 分		重 量 1,000トン			金 額 US\$100万 CIF		
関税番号	品 目	1984	1985	増 減	1984	1985	増 減
Seção 01	動物及びその製品 計	117.0	129.2		110.7	115.4	
	植物及びその製品						
07.01.05.00	ニ ン ニ ク	21.5	17.4	(-) 19.1	10.7	9.8	(-) 8.4
07.01.08.01	種子じゃがいも	2.1	2.1	—	0.9	0.9	—
07.03.05.01	アセイトーナ	18.6	26.4	41.9	9.6	13.3	38.5
07.05.03.01	黒フェイジョン	4.5	—	—	2.7	—	—
07.05.03.02	白 〃	4.7	4.7	—	1.9	1.9	—
07.05.03.09	その他のフェイジョン	71.3	—	—	38.4	—	—
08.06.01.00	リ ン ゴ	94.4	98.9	4.8	29.9	27.8	(-) 7.0
08.06.02.00	梨	36.4	30.9	(-) 15.1	11.8	10.3	(-) 12.7
10.01.02.00	小 麦	4,430.0	3,286.0	(-) 25.8	667.7	460.1	(-) 31.1
10.03.01.00	大 麦	132.0	158.6	20.1	28.3	22.7	(-) 19.8
10.05.02.00	とうもろこし	209.6	565.0	169.6	34.9	65.1	86.5
10.06.02.00	白 米	—	60.7	6,070.0	—	13.2	1,320.0
11.07.01.00	マ ル テ	108.8	146.0	34.2	35.5	31.5	(-) 11.3
12.06.01.00	ホ ッ プ	1.9	2.2	15.8	10.2	10.4	2.0
	そ の 他	310.3	903.9	191.3	112.2	231.0	105.9
Seção 02	小計	5,446.1	5,302.8	(-) 2.6	994.7	898.0	(-) 9.7
	動 植 物 油						
15.07.01.01	大 豆 (粗 油)	108.9	46.1	(-) 57.7	74.2	26.4	(-) 64.4
15.07.01.04	オリーブ油 (粗 油)	5.2	6.4	231.	6.0	7.9	31.7
15.07.02.01	大 豆 油 (精製油)	33.3	8.0	(-) 76.0	23.5	5.2	(-) 77.9
15.07.02.04	オリーブ油 (精製油)	4.2	3.4	(-) 19.1	7.2	5.5	(-) 23.6
	そ の 他	37.7	28.6	(-) 24.1	25.0	16.4	(-) 34.0
Seção 03	小計	189.3	92.5	(-) 51.1	135.9	61.4	(-) 54.8
Seção 04	加 工 食 品 小計	13.7	20.2	47.4	15.6	18.8	20.5
	皮 革 及 び 製 品						
Capítulo 41	皮 革	17.4	11.3	(-) 35.1	156.8	93.9	(-) 40.1
	そ の 他	0.5	0.8	60.0	1.9	6.0	215.8
Seção 08	小計	17.9	12.1	(-) 32.4	158.7	99.9	(-) 37.1
Seção 09	木 材 及 び 加 工 品 小計	332.3	286.8	(-) 13.7	28.3	30.3	7.1
	合 計	6,296.8	5,831.5	(-) 7.4	1,285.2	1,124.9	(-) 12.5



#### 4.4 1985/86農年の作付状況

次に用いるデータはIBGE（ブラジル地理統計院）が85年10月に行った85/86農年の作付状況調査にもとづくものである。対象地域は南部、南東部及び中西部地方の全州と北部地方の中ロンドニア州（注：地理上の区分ではアマゾン地帯に含まれるが、農業経済上からは中西部の連続とみることが出来る）とし、主要13品目をとりあげたものである。この調査が行なわれたあとも南部地方と南東地方の長期乾燥が続き、発芽不良地域の播直しや発芽不良のまま播種適期を越した地域もあるので、作付面積、単収予想に可成りの変化が生じている筈であることを付記しておく。

上記品目の中主要作物の作付状況をみると次の通りである。

##### 1) 米

ロンドニヤ州を加えた中央—南部地方の作付けは85年の収穫面積を11.8%上廻る407万ヘクタールとなる見込みである。平均単収はサンパウロ州、リオ・グランデ・ド・スール州、マツ・グロツン・ド・スール州、ゴヤス州で前年に劣る見込みであり、全体的に(-)4.6%の単収減少が予想されている。単収の減少予想にかかわらず作付面積が増加しているので、生産量は前年を上廻り820万トンに達する見通しである。

作付面積にみられる増加は前年度の米価がインフレ率を下廻る値動きではあったが、8月に予想された生産コストを上廻る水準にあり生産者の興味をひいたこと、価格が低迷した大豆作をやめて米に切替えたものが多くあったこと、政府の国内食糧生産奨励策に刺戟されたことなどがあげられる。

米どころのリオ・グランデ・ド・スール州では736.7千haの作付が行なわれているが、この中702.7千haが水田、残りが陸稲となっている。単収予想は前年より(-)2.09%劣る4,355 kg/haであり前年並みの320万トンの収穫が期待されている。

中央—南部地方の中で作付面積が大巾に増加しているのは中西部地方で、平均して前年比21.1%、中でもマツ

表 321 85/86農年の作付状況（主要13品目）南部、南東、中西部及び北部の一部

作物別	面積 1,000ha		増減 %
	84/85年収穫面積	85/86年作付面積	
米	3,643.9	4,074.4	11.8
フェイジョン（雨期収穫）	1,635.2	1,622.5	- 0.8
とうもろこし	9,090.1	9,566.6	5.2
大豆	10,081.5	9,697.2	- 3.8
落花生（雨期収穫）	136.1	124.4	- 8.6
ヒマ	73.6	70.9	- 3.6
砂糖キビ	2,545.9	2,617.8	2.8
綿	1,226.0	983.4	- 19.8
マンジョカ	586.3	604.9	3.2
煙草葉	207.6	217.1	4.6
じゃがいも（雨期収穫）	95.6	95.8	- 0.2
玉ねぎ	51.3	54.9	7.1
トマト	34.8	33.6	- 3.5

出所：IBGE

ト・グロツン・ド・スール州 (28.0%)、マツト・グロツン州 (24.2%) が大きい。これら中西部地方における生産増加は価格水準と単収レベルが満足すべきものであったことや、大豆作よりの切換え、最低保証価格やVBCの水準が生産者に満足を与えた結果である。またゴヤス州では農地改革にもとづく新しい生産地帯の出現も生産増加に影響していると報告されている。

表 322 85/86農年の単収予想 (主要13品目)

作物別	単収 kg/ha		増減 %
	84/85 実績	85/86 予想	
米	2,110	2,014	- 4.6
フェイジョン (雨期収穫)	658	700	6.4
とうもろこし	2,241	2,244	0.1
大豆	1,805	1,793	- 0.7
落花生 (雨期収穫)	1,911	1,691	- 11.5
ヒマ	1,237	1,271	2.7
砂糖キビ	70,148	66,906	- 4.6
綿	1,787	1,733	- 3.0
マンジョカ	14,999	15,160	1.1
煙草葉	1,714	1,688	- 1.5
ジャがいも (雨期収穫)	12,541	12,150	- 3.1
玉ねぎ	11,345	11,473	1.1
トマト	39,648	41,030	3.4

出所: IBGE

表 323 85/86農年生産予想 (主要13品目)

作物別	生産量 1,000トン		増減 %
	84/85 実績	85/86 予想	
米	7,687.2	8,206.1	6.8
フェイジョン (雨期収穫)	1,076.6	1,135.6	5.5
とうもろこし	20,375.8	21,464.7	5.4
大豆	18,193.8	17,381.8	- 4.5
落花生 (雨期収穫)	260.2	210.3	- 19.2
ヒマ	91.1	90.1	- 1.0
砂糖キビ	178,594.9	175,147.2	- 1.9
綿	2,191.0	1,704.7	- 22.2
マンジョカ	8,793.6	9,169.7	4.2
煙草葉	355.9	366.4	2.9
ジャがいも (雨期収穫)	1,199.3	1,163.8	- 3.0
玉ねぎ	582.0	630.1	8.2
トマト	1,380.8	1,377.9	- 0.2

出所: IBGE

## 2) フェイジョン

南東地方(-3.8%)、中西部地方(-5.5%)とも面積を減少し、南部地方(+0.9%)がわずかに増加、全体的に前年をわずかに下廻る作付面積である。

最大の生産州パラナ州では長期乾燥のため州内北西部で適期に播種が出来なかったことを理由に作付けは前年を(-)1.44%減少した。パラナ州に次ぐ生産地帯のサンタ・カタリーナ州では乾燥の被害はなく作付面積の増加(+3.72%)が記録されている。同州における作付の増加は大豆生産よりの切換えのほか、フェイジョン作に対する融資が零細農及び小農に対してVBCの100%が解除されたこと、他の作物よりも回転が早く資金効率が高い点などによっている。

リオ・グランデ・ド・スール州においても作付面積の増加がみられ、前年を上廻る(+6.1%)作付が行なわれた。この作付増加は85年の乾期収穫物の価格がよくこれに刺戟されたものである。

これら南部地方の作付け増加に対し、南東部及び中西部地方では前年比それぞれ(-)3.8%及び(-)5.5%の減少となっている。南東地方ではミナス・ジェライス州における天候不順、サンパウロ州での市場価格がフェイジョン作を敬遠した理由であり、また中西部地方では長期乾燥によって適期の播種が出来なかったのが影響した。

## 3) とうもろこし

作付面積の増加に伴ない生産の増加が期待されている。作付け面積は Rondônia 州を除く全体に増加傾向にある。とうもろこしの作付増加の理由としては政府の奨励策に刺戟されたことや、牛肉の価格上昇により養鶏、養豚部門の飼料需要が増加したことがあげられる。サンパウロ州では前年の市場価格が低く生産を刺戟するものではなかったが、長期乾燥の被害を受けた地域では代替え作物としてとうもろこし選ばれており、これが作付増加の理由となっている。

国内最大の生産州パラナ州では綿や大豆の市況が悪かったため、これらに代ってとうもろこしが栽培されており、わずかながら面積を増加している。綿や大豆に比してより多くの農業融資が提供されているのも作付増加の理由とされている。州内の播種時期は12月末まで可能とされるが、長期乾燥のため圃場の準備が遅れているので12月末までに完了出来るか懸念されている。

## 4) 大豆

全体的に作付けは減少しており、主要生産州もマツト・グロソン州を除いて作付減少の傾向である。これは85年度における大豆の国際価格が低く、これを反映した国内価格は政府が設定した最低価格を下廻ったため、過去に例のない政府買上げの増加があり、大豆作にとっては極めて香ばしくない市場が支配した。このような85年の大豆市況が85/86農年の作付けを減少させたもっとも大きな理由となっている。

大豆の場合も他の作物と同様に長期乾燥の被害を受けて播種が遅れており、中には発芽が不良で播直しを必要としている地域も多いので、今後の生産予想は更に変化していくものと思われる。

《参考資料》

LEVANTAMENTO SISTEMÁTICO DA PRODUÇÃO AGRÍCOLA	ブラジル地理統計院
ANUÁRIO ESTATÍSTICO DO BRASIL	全上
PROGNÓSTICO 83/84, 84/85	サンパウロ州農務局農業経済研究所
INFORMAÇÃO ECONÔMICO	全上
RELATÓRIO 1984	ブラジル中央銀行
COMÉRCIO EXTERIOR	ブラジル銀行貿易管理局
CONJUNTURA ECONÔMICA	ゼツリオ・ヴァルガス経済研究所
AGROANALYSIS	全上
RELATÓRIO ANUAL DA CFP 1983	生産融資公社
CARTA DE CFP	全上
GAZETA MERCANTIL	ガゼッタ・メルカンチル紙
SUMA AGRÍCOLA	タマ・エジトーラ社週刊農業情報

【おことわり】

1. 単位のくり上げの為に、合計欄の数字とうちわけを合計した結果が一致しないことがあります。
2. 統計表で最近年の数字は、後で修正されることがあります。

1986年3月 報告書作成

SIN PROMOÇÃO E MARKETING LTDA.

Impresso na Gráfica e Editora Nippon' Art Ltda.



JICA